

## 旧英領カリブ海地域における白人性の多様性

## —バルバドスとトリニダードの比較—

A diversity of whiteness in the British West Indies

—Questioning whiteness: “Who is white?” in Barbados and Trinidad—

伊藤 みちる<sup>1</sup><sup>1</sup>大妻女子大学国際センターMichiru Ito<sup>1</sup><sup>1</sup>International Center, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：白人性，トリニダード，バルバドス，旧英領カリブ海地域

Key words : Whiteness, Trinidad, Barbados, The British West Indies

## 抄録

本稿は、旧英領カリブ海諸島におけるヨーロッパ系白人のアイデンティティとしての白人性の多様性に着目し、バルバドスとトリニダードを例に、白人性の違いやその特徴を探るものである。この課題は、フランス系トリニダード人の白人性構築の過程について探った拙稿 “Constructing and Reproducing Whiteness: An oral history of French Creoles in Trinidad” (2016)<sup>[1]</sup> と “French Creoles in Trinidad: Constructing and Reproducing Whiteness” (2006)<sup>[2]</sup> において、フランス系トリニダード人が他ヨーロッパ系白人と同一視されることが不本意であると強調していたことに端を発する。本稿では特に「ヨーロッパ系白人とは誰か」という問いを中心に、蓄積が少ないカリブ海地域の白人性に関する実態の一端を明らかにすることを目指した。そのため2016年8月と2017年2月にバルバドスとトリニダードを訪問し、ヨーロッパ系白人であると自己認識し、他者にも認識される者を対象にオーラル・ヒストリーの聞き取りを行った。本稿で引用した各島5名分の語りの分析から明らかになったのは、バルバドスのヨーロッパ系白人は自身の混血の事実を隠そうとせず、身体的特徴が許す限りバルバドス社会ではヨーロッパ系白人として認識され、ヨーロッパ白人として名乗れるということである。他方、白人としての純血性が重視されるトリニダードでは、ヨーロッパ系白人は自身の混血の可能性を否定し、異人種間結婚に嫌悪を示す者が多かった。バルバドス総人口の2.7%、トリニダードの総人口の0.7%しか存在しないヨーロッパ系白人が、今後も「白人」であり続けることは、特にこのグローバル化が進んだカリブ海地域では困難である。そのような状況下においてなぜヨーロッパ系白人としてのアイデンティティを強固に持ち続けるのか。それについては、後続研究としてヨーロッパ系白人と非ヨーロッパ系白人の交流に注視していきたい。

## 1. はじめに

南北アメリカ大陸と中南米地域に囲まれ、大西洋へと開いているカリブ海地域の島々は、ヨーロッパ諸国の間で領有権が何度も移動した歴史を持つ。それに伴って社会構造が幾度も変化してきたため、人種・民族の人口構成や、使用言語も異なる。そのためカリブ海地域を一体として捉えることは困難である。カリブ海地域の中でも特に英国

による植民地支配を経験した旧英領カリブ海地域は、現在、アフリカ系やインド系、中国系やシリア・レバノン系、そしてヨーロッパ系などの多民族が各々の文化を保ちながら、平和的に共生している非常に稀な地域である。

カリブ海地域というと、いわゆる「ドレッドヘアのラスタマン」や、陸上競技で圧倒的な強さを見せるアフリカ系選手のイメージが強いが、ヨー

ロッパ系の人々も存在する。旧英領カリブ海諸島の中で、ヨーロッパ系白人の人口が比較的多いのは、バルバドスとトリニダードである。2017年現在、ヨーロッパ系白人はそれぞれ、バルバドスの総人口比2.7%<sup>[3]</sup>、トリニダード・トバゴの総人口比0.7%<sup>[4]</sup>存在している。このように人口では圧倒的に少数派ではあるが、彼らは植民地時代より経済的・政治的・文化的影響力を持ち続け、社会では絶対的な存在感を持ち続けている<sup>[5]</sup>。

独立以降、バルバドスもトリニダードも、アフリカ系やインド系が政権を握っており、政治・司法の世界には多くのヨーロッパ系白人は存在しない。しかしヨーロッパ系白人が持つ経済力からか、またその発言力からか、実質的には未だにヨーロッパ系白人がバルバドスとトリニダードを動かしている。それは非ヨーロッパ系市民がヨーロッパ系白人に対して持つなんとも不思議な姿勢によるものだ。つまり植民地時代の名残で精神的な支配が続いているのか、植民地時代には絶対的なマスターであったヨーロッパ系白人に対するコンプレックスに基づく感情からか、何とははっきり言えない見えない力関係が存在しており、ヨーロッパ系白人の言動や存在は必要以上に目置かれている。例えば、植民地時代から広大な土地を相続し続けるヨーロッパ系白人が大打撃を受ける相続税や固定資産税について、税率を上げようと試みた政権もあったが、実現したことはない。本稿では、そのような未だに特別な存在であるヨーロッパ系白人社会の規模が比較的大きいバルバドスとトリニダードにおける、ヨーロッパ系白人の白人性、つまり非白人に対する白人としてのアイデンティティについて焦点を当てる。

## 2. 研究概要

本稿は、旧英領カリブ海諸島における白人性の多様性に着目し、バルバドスとトリニダードを例に、その二つの島におけるヨーロッパ系白人の白人性の違いやその特徴を探るものである。その課題は、執筆者の先行研究において、フランス系トリニダード人の白人性構築の過程を分析した際、フランス系トリニダード人が他ヨーロッパ系と同質の「白人」として分類されるのが不本意であると強調していた<sup>[6]</sup>ことに端を発する。例えば観光客のような、まったくの部外者がトリニダードを訪問し、フランス系トリニダード人を見かけたら、

「白人」として認識し、その人物の家族史などの背景まで思いを馳せることはまずないであろう。しかし当事者であるフランス系トリニダード人は、「白人」として同じように見えたとしても、トリニダードにおけるその家族の歴史やトリニダードへの愛着や貢献という観点から見ると、まったく違うものであるから、非フランス系の白人と一緒にして欲しくないと言明する者が少なくなかった。現在のトリニダードに存在する非フランス系のヨーロッパ系白人とは、イングランド系やスコットランド系、アイルランド系やドイツ系、スペイン系やポルトガル系など<sup>[7]</sup>であるが、さらに身体的特徴が似ていることからシリア・レバノン系も「白人」として認識されることもある<sup>[8]</sup>。そこで、トリニダードには「白人」の中にも、様々なアイデンティティが存在することが容易に想像できるようになった。

ではトリニダード以外のカリブ海地域の島における「白人」コミュニティはどうであろうか、と注目したのが、バルバドスである。なぜなら、トリニダードがスペイン統治からフランス移民流入を経てイギリスから独立したのとは異なり、バルバドスはイギリスにしか統治されておらず、イギリス以外のヨーロッパ諸国からの組織的な移民の歴史がないからだ<sup>[9]</sup>。そのため執筆者は、バルバドスのヨーロッパ系白人は、トリニダードのように父祖のヨーロッパの出身国ごとのアイデンティティはないのではないかと予想した。そして、バルバドスは他カリブ海諸島と比較し、「白人」人口比がわずかに大きいため、非ヨーロッパ系市民との関わり方も異なるのではないかと考えたからである。

現在、カリブ海地域に住むヨーロッパ系白人に関する社会研究はほとんど存在しない<sup>[10]</sup>。また独立後のカリブ海史にもヨーロッパ系白人の記述は皆無に近く、まるで存在しないかのようだ<sup>[11]</sup>。非ヨーロッパ系の人々は、一概にカリブ海地域のヨーロッパ系白人を、植民地時代に非人道的な奴隷制を通じて非ヨーロッパ系の人々の祖先を酷使し、そうして不当に蓄えた巨富が現代にまで継承されてきたため不平等に豊かな存在であると信じている<sup>[12]</sup>。そのためヨーロッパ系白人は、植民地時代から現代まで続く不当な富の配分に関して不満を抱く非ヨーロッパ系の人々にとって、妬みと僻みの対象である<sup>[13]</sup>。つまり、非ヨーロッパ系の人々にとって、ヨーロッパ系白人は、植民地時代の終

焉とともに存在ごと葬りたかった対象であった。独立を機に政権を握る側になった非ヨーロッパ系の人々は、ヨーロッパ系白人があたかも社会に存在しないかのように、あえて彼らに関する記述をしなくなったと考えられる。

前述のとおり、カリブ海地域におけるヨーロッパ列強から独立以降のヨーロッパ系白人を対象もしくは中心に据えた社会研究やエスノグラフィは、管見の限り内外に多くは存在しない。このようにヨーロッパ系白人側からの歴史的・社会的記録が一部欠けている現在、特に独立以降の社会におけるヨーロッパ系白人の経験を記録する必要があると考え、本研究では個人の経験が「証言」として歴史叙述に利用されるオーラル・ヒストリー法を選択した。

執筆者は、バルバドスとトリニダードにおいて、2016年8月と2017年2月の2回、ヨーロッパ系白人に対しオーラル・ヒストリー聞き取り調査を行った。本稿は、オーラル・ヒストリーを通じて、イギリスからの独立を境に少数派となり、独立以降の歴史的・社会的記述にほとんど存在してこなかったヨーロッパ系白人の興味深い個人の人生や生活の他、実際には社会においてどのような経験をしてきたかについて記録することを目指した。そして、その聞き取りを通じて入手した彼らの語りから、個人の経験を複数積み重ねて分析することで、ヨーロッパ系白人のアイデンティティである白人性がどのように構築されてきたのかを明らかにする一端を担うことができると考えた。

そのため本稿は、バルバドスとトリニダードにおいて非ヨーロッパ系白人である他者との関係から構築されたヨーロッパ系白人の白人性の特徴とその構築過程を提示し、比較することを目的とした。つまり、ヨーロッパ系白人のオーラル・ヒストリーによる語りから、①アフリカ系やインド系などの非ヨーロッパ系市民と共に構成されている複合的な社会階層・階級、②その複合的な社会階層・階級の中で経験する人種的・文化的軋轢、③その軋轢を通じて、ヨーロッパ系白人は非ヨーロッパ系市民とどのような関係を築いてきたか、④ヨーロッパ系白人は非ヨーロッパ系市民との違いをどのように認識したのか、について明らかにしたい。しかしバルバドスとトリニダードのヨーロッパ系白人の白人性を明らかにするという点で先駆的な研究でありたいと願っているが、紙面の関係上、

調査結果すべてについての考察を本稿で行うのは難しい。そのため本稿では、上記①～④について、バルバドスとトリニダードにおける「ヨーロッパ系白人とは誰か」という問いを中心に、その実態の一端でも明らかにすることを目指した。今まで記録されたことのないバルバドスとトリニダードのヨーロッパ系白人の語りを提示し、両島の白人性研究の第一歩となることを期する。

なお本稿では、祖先がヨーロッパ諸国からカリブ海地域に移住し、自らをヨーロッパ系白人だと自覚し、他者からもヨーロッパ系白人であると認識されている者を「ヨーロッパ系白人」と呼ぶ。彼らこそが本研究の対象である。カリブ海地域には様々な「白人」が存在し、時には中南米からの移住者やシリア・レバノン系など身体的特徴がヨーロッパ系白人に近い者も「白人」と分別されることがある<sup>[14]</sup>。そのような非常に不安定な「白人」は、本稿の趣旨とは合わないため取り上げない。

### 3. 先行研究

#### 3.1. カリブ海地域の歴史背景

15世紀後半のコロンブスによる「新大陸発見」以来、1494年にローマ教皇により新大陸征服の優先権を認められたスペイン<sup>[15]</sup>は、16世紀にはカリブ海全域の領有権を主張した。しかし実際には、スペインの関心は金銀などの資源が埋蔵する中南米の支配に傾いていたため、カリブ海においてはイスパニョーラ、キューバ、プエルトリコ、ジャマイカ、トリニダードといった比較的大きな島しか植民地化されなかった。そして植民地化が進められても、その度合いはまちまちであった。例えば、1496年にコロンブスの弟が南北アメリカ初のヨーロッパ人による都市サント・ドミンゴをイスパニョーラに建設したが、その繁栄ぶりは現在も残る宮殿風の住宅や荘厳な教会を含む町並みからもうかがえる。他方、1498年にコロンブスの第3回航海で「発見」されてスペイン領となったものの、トリニダードは植民地として開拓されずに放置され続けていた<sup>[16]</sup>。

17世紀にはトリニダード近隣のカリブ海南東の小アンティル諸島の領有権を巡り、イギリスやフランス、オランダやデンマークなどのヨーロッパ列強が進出してきた。そのためカリブ海地域には、1814年にイギリス領となる以前の316年間に、オランダ、フランス、イギリスの間で領有権が31回

移動したトバゴ<sup>[17]</sup>や、1674年から1814年までにフランスとイギリスで領有権が13回移動したセントルシア<sup>[18]</sup>のような島々が少なくない。それとは対照的に、バルバドスは1627年から1966年に独立するまで一貫してイギリスの植民地だった<sup>[19]</sup>。

こうして15世紀からヨーロッパ列強はカリブ海地域の植民地開発を始めた。これから独立までの植民地時代には、殺掠や過重労働の強制、またヨーロッパから持ち込まれた疫病により、先住民は限りなく絶滅に近い状態にまで激減した<sup>[20]</sup>。それに代わる労働力として、カリブ海地域には世界各地から労働力が集まってきた。まずイギリスは、当時増え続けていたアイルランドやスコットランド、イングランドの貧困層や政治犯を、使い捨て労働力として島に送りつけた<sup>[21]</sup>。そのうち強制的にカリブ海地域のバルバドス、ジャマイカ、モンセラートなどに送り込まれたアイルランド人は約6万人<sup>[22]</sup>に上るとされる。これに並行して、イギリス全土から年期契約労働者も海を渡った<sup>[23]</sup>。また奴隷としてアフリカ大陸より連行された労働者は、諸説あるが、573万人<sup>[24]</sup>にも上るとする説もある。加えて、インドから55万人<sup>[25]</sup>、中国から60万人<sup>[26]</sup>、ジャワ島から3万人<sup>[27]</sup>の年期契約労働者が導入された。さらに、産業革命後にはヨーロッパから農業移民もやってきた<sup>[28]</sup>。こうして植民地時代のカリブ海地域には、プランテーション領主であるヨーロッパ系白人や植民地政府役人を支配層とする世界各地からの労働者が共生する多民族・多文化社会が形成された。

### 3.2. カリブ海地域のヨーロッパ系白人

このようにカリブ海域におけるヨーロッパ系白人は、「新大陸を発見」し、絶対少数派として圧倒的な支配者であり続けてきた者だけではなかった。むしろヨーロッパ系白人の中では、孤児や戦争未亡人などの貧困層、政治犯や農業移民などの方が大多数を占めていた<sup>[29]</sup>。その結果、カリブ海地域におけるヨーロッパ系白人社会には、出身や出自、宗教や職業など、様々な細かい基準に基づく、階層が構築されていった<sup>[30]</sup>。それに加え、植民地時代のカリブ海地域のヨーロッパ系白人は、出自も教育水準もカリブ海域への愛着も様々だった<sup>[31]</sup>。例えば、数年単位で異動しなければいけないイギリス人の植民地政府下級役人と、革命で帰る祖国を失ったフランス王党派貴族とでは、カリブ海地

域での滞在に何を求めるかなど、あらゆる面で相容れないものがあったとしても当然である。

アメリカの公民権運動の影響を受けた1970年代には、カリブ海地域でもアフリカ系住民を中心としたブラック・パワー運動が活発化した。その際には特に、植民地時代から続くヨーロッパ系白人を頂点とする、人種・民族を基準とした社会階層とそれに伴う不平等な富の配分の是正が叫ばれた。つまり社会的には少数でありながら、政治的・経済的・文化的には強者であるヨーロッパ系白人に対し、不満の矛先が向けられた<sup>[32]</sup>。結果として、多くのヨーロッパ系白人が欧米へ移住した一方、一部のヨーロッパ系白人は、植民地時代と同じような経済的・政治的特権を享受し続けることが可能な環境に留まることを選んだ<sup>[33]</sup>。

現代の旧英領カリブ海地域のヨーロッパ系白人人口の構成を見ると、先述のように植民地政府へ派遣された役人の子孫、新天地カリブ海域に移住してきたエリート入植者の子孫、年期契約労働者の子孫、イギリスやアイルランドから送り込まれた貧困層や政治犯の子孫、カリブ海地域での避寒を目的として生活する現代の富裕層や年金生活者など、依然として多様である。そのように多彩な背景を持つ現在のカリブ海地域に住むヨーロッパ系市民は、非ヨーロッパ系市民からは一概に富の象徴と見られており、僻みやねたみ、また憧れの対象として見られることが少なくない<sup>[34]</sup>。なお現在のカリブ海地域のどの島にも、少数であってもヨーロッパ系白人コミュニティは必ず存在し、各国の法律では人種・民族や信条による差別を禁止している<sup>[35]</sup>。

植民地時代にヨーロッパから移住してきたカリブ海地域のヨーロッパ系白人については、前述のとおりプランテーション領主や年期契約労働者、犯罪者や植民地政府役人など、多彩な背景を持つにも関わらず、一概に非人道的な奴隷貿易・所有から形成した莫大な富を継承しているとされ、現代でも好意的に見られることはまれである。そのためイギリスからの独立以降、植民地時代に被支配層であったアフリカ系やインド系市民が政権を担うようになってからは、ヨーロッパ系白人はあたかも存在してこなかったかのように、伝統的な歴史資料から排除されてきた。さらに学術的にも、彼らはカリブ海地域を開拓し、著しい経済的・文化的貢献を行ってきたにもかかわらず、研究対象

になってこなかった<sup>[36]</sup>。

その理由には二つあると考えられる。一つは、非ヨーロッパ系市民が自らの祖先が虐げられてきた歴史を強調することで、自らを歴史の軸に置くことが可能となり、その結果、現代社会の中心にいられること。二つ目に、非ヨーロッパ系市民は、ヨーロッパ系白人に対し、一方的に「搾取者」・「弾圧者」といったレッテルを貼って周縁に追いやり、自らを社会の中心に置くことで満足感を得ているという側面があるが、ヨーロッパ系白人には、こうした仕組みによって、現在、非ヨーロッパ系市民との表面的な軋轢が回避され、平和に暮らせるならそれでよしと、この流れを看過する傾向がある。そのため、カリブ海地域のヨーロッパ系白人については、現在においても最も未開な研究分野となっている。これはアフリカ系・インド系市民など非ヨーロッパ系市民に関する歴史・社会研究が盛んに行われている実態と間逆であり、カリブ海地域におけるアンバランスな歴史・社会観を生み出している。

またカリブ海地域の中国系に関しては、本邦でも柴田<sup>[37]</sup>や前山<sup>[38]</sup>などの研究が存在するが、大々的にカリブ海地域における現地発の中国系の歴史や社会的貢献の研究が始まったのは、中国からのカリブ海地域への組織的な移民流入が始まった1806年から200周年を経た2006年頃である<sup>[39]</sup>。

トリニダードでは、中国移民200周年を記念した中国政府からの助成を受け、在トリニダードの中国大使館主導で、中国系を中心にした研究者が多くの研究を発表した<sup>[40]</sup>。なお2013年にフランス政府も、在トリニダードのフランス大使館を通じて、フランス系移民がトリニダードへの組織的な移住を開始した1783年の230周年記念事業の一つとして、トリニダードにおけるフランスやフランス人、またフランス系トリニダード人の業績を纏めようとしたものの、頓挫したようである<sup>[41]</sup>。

非ヨーロッパ系トリニダード人がフランス系をはじめとするヨーロッパ系白人のトリニダード人のことを好ましく思っていない様子は、2016年に一人のフランス系女性がトリニダードの日刊紙であるエクスプレス紙に、アフリカ系トリニダード人の生活態度への不満を投書し、その内容への反論が紙面とネット上で「炎上」した、その激しさからもわかる。元の投書は当日のうちにエクスプレス紙が掲載を取りやめたが、転載された記事と

人々の激しい反応は今も一部を読むことができる。その中には、「フランス系トリニダード人がプランテーションで我々の祖先を奴隷としていたぶり苦しめた悪行を忘れるな」という趣旨の読者からの投稿が目立った<sup>[42]</sup>。そのような匿名で行われる紙面やネット上でのヨーロッパ系白人に対する攻撃の激しさにも関わらず、実際にはヨーロッパ系白人たちが身体に危害を加えられたりすることはなかった。しかし匿名だからこそ言えてしまう非ヨーロッパ系市民のヨーロッパ系市民に対する僻み、妬み、憎悪は相当なものであることがわかると同時に、実社会において対面ではそれらを表さないマナーを心得ていることも特筆すべきであろう。このような社会環境の中、現在のカリブ海地域の多民族社会を構成する要員のうち、ヨーロッパ系白人についての植民地時代以降のエスノグラフィだけは極端に少ない。それは単にヨーロッパ系白人の全体的な人口が少ないという理由だけではなく、歴史的また政治的な背景があることは確かである。

### 3.3. バルバドス

カリブ海の最東端に位置し、約431平方キロメートルの平坦な島であるバルバドスは14世紀にはポルトガル人が上陸を果たした<sup>[43]</sup>ようだが、1627年からイギリスが本格的に植民地化を始めた。バルバドスに新天地を求め、植民地開発を開始した入植者は、ヨーロッパの生活様式をそのまま持ち込んだ<sup>[44]</sup>。そのため、彼らは入植に際し、家族の身の回りの世話や家事を担当する使用人が必要だった。バルバドス入植に関する文書によると、イングランド人ヘンリー・パウエルは、1627年に10人のアフリカ人奴隷と80人を連れてバルバドスに入植したと記録されている<sup>[45]</sup>。この80人の内訳は不明であるが、家族と使用人、また労働者などであると考えられている。さらにはその3ヵ月後には、労働者と記録された男女が2艘の船でイングランドからバルバドスに到着している<sup>[46]</sup>。バルバドスを開拓するためにも労働者は必要であったが、それよりも入植者が持ち込んだヨーロッパの生活様式を支えるためには、ヨーロッパの労働者階層の入植者が必然的に多く必要だった。例えば、新たな入植地に建設した大邸宅での生活には、掃除や洗濯、裁縫や料理、乳母にいたるまで、それぞれを担当とする何人もの女性使用人が必要であ

った。また執事や従者、家畜や自家農園の世話を  
する多くの男性使用人も必要であった。

クロムウェルがアイルランド侵攻に成功した後、  
1650 年頃からは、イングランドはアイルランドの  
カトリック・エリートへの弾圧を強め、アイルラ  
ンドの荒野への移住を強制した<sup>[47]</sup>。それに従わな  
かったカトリックの地主層をバルバドスへ強制送  
還し、死ぬまで重労働を課した。バルバドスへ送  
還されたことは当時の英語の言葉で「Barbadosed」  
と呼ばれ、死刑宣告に等しかった<sup>[48]</sup>。こうして、  
イングランドの植民地的性格が強くなったアイル  
ランドやスコットランドから、労働力としてバル  
バドスに連れて来られたカトリックの地主層、孤  
児や売春婦、犯罪者や貧困街で誘拐された子ども  
たちの人数は、約 6 万人にも上った<sup>[49]</sup>。それと同  
時に年期契約労働者としてバルバドスに渡った者  
も多かった。このようにヨーロッパからも労働力  
が流入し続けた結果、1816 年のバルバドス国勢調  
査<sup>[50]</sup>によると、支配者層や植民地政府役人なども  
含めた 16,020 人のヨーロッパ系白人が存在し、そ  
の 9 割がバルバドス生まれのアイルランド系で第  
6 世代以降であるとの記録がある。

アイルランドからバルバドスへのカトリック・  
エリートの強制入植と平行し、アフリカからもバ  
ルバドスに大量の労働者が奴隷として導入された。  
1655 年にはヨーロッパ系白人の人口が 23,000 人  
だったのに対し、アフリカ人奴隷は 20,000 人であ  
った<sup>[51]</sup>。しかし、1684 年にはヨーロッパ系白人  
19,568 人に対し、アフリカ人奴隷は 46,602 人と激  
増していった<sup>[52]</sup>。これらのアフリカ人奴隷は、ア  
イルランドから強制送還された者や年期契約労働  
者と同様に、サトウキビ・プランテーションへ労働  
力として導入された。このようにアフリカ人奴隷  
である黒人とアイルランド労働者である白人が、  
人種別の分業もなく、完全に同じ内容の作業を行  
っていたプランテーションを有する島は、カリブ  
海地域でも数少ない<sup>[53]</sup>。

バルバドスが他の多くのカリブ海地域の島々と  
異なる点は、一貫してイギリス領だったことであ  
る。それと同時に、サトウキビ・プランテーション  
の労働力に、アフリカ人奴隷と同様に、多数のヨ  
ーロッパ系白人労働者が用いられていたことであ  
る。現在は、その当時、被支配者層に属していたヨ  
ーロッパ系白人労働者の子孫を見つけるのは難し  
い。現在は子孫の多くが議員や弁護士、会社経営

や学者として成功し、社会のエリートの仲間入り  
をしているため、絶対数が少なくなっているから  
である。しかし未だに、カリブの強烈な太陽の下  
で農作業をすることにより、脚が焼け爛れて赤く  
なって「レッドレッグ」と呼ばれ、貧困に苦しむア  
イルランド系労働者の子孫も存在する<sup>[54]</sup>。したが  
って、現在のバルバドスのヨーロッパ系白人は、  
植民地時代の支配者層の子孫や、アフリカ人奴隷  
と同様の労働に従事していた労働者の子孫など、  
さまざまな背景を持つ。

### 3.4. トリニダード

トリニダードは、カリブ海の最南端に位置し、  
南米大陸のベネズエラから 11 キロしか離れてい  
ない約 5,131 平方キロメートルの山がちな島であ  
る。1498 年にコロンブスが上陸し、スペイン領土  
となったものの、植民地として開発されることも  
なく放置され続けた。そのため、コロンブス上陸  
から 274 年を経た 1772 年においても、スペイン人  
入植者 326 人と先住民 417 人しか確認できないほ  
どであった<sup>[55]</sup>。しかしその頃、東カリブ海地域へ  
の進出が目立ってきていたイングランドに対抗す  
るため、スペイン政府は 1783 年、カトリック同盟  
国であるフランスの仏領カリブ海諸島から移民を  
募集し始めた<sup>[56]</sup>。そこにフランス革命やハイチ独  
立が追い風となり、フランス本土や、グアドルー  
プやマルティニークなどの近隣仏領カリブ海諸島  
から、また 1763 年にフランスからイギリスに領有  
権が移ったグレナダから、フランス語を話し、フ  
ランス文化を持つ、フランス人たちが大挙して移  
住してきた。その内訳は、フランス王党派貴族が  
計 158 世帯<sup>[57]</sup>、そしてフランス人や自由黒人の農  
園主と、彼らがそれぞれ所有する大量のアフリカ  
人奴隷である。トリニダードへの入植を促進した  
いスペイン政府は、税制面での優遇や広大な土地  
の無償供与を行うなど、入植者に対し特別待遇を  
保障した<sup>[58]</sup>。それが功を成し、フランスからの移  
民へ門戸を開ける 10 年前の 1773 年には 1,000 人  
に満たなかったトリニダードの人口は、門戸解放  
14 年後の 1797 年には、18,627 人に激増したと記  
録されている<sup>[59]</sup>。よってトリニダードのフランス  
系移民は、移住当初からコットン、コーヒー、カカ  
オ、サトウキビなどのプランテーションを展開し  
莫大な財産を成した。

その後 1797 年に実質的にイギリス領となった

トリニダードは、1802年にフランス革命戦争の講和条約により正式にイギリス領となった<sup>[60]</sup>。1808年の人口調査は、ヨーロッパ系白人2476人を出身別に分けており、その内訳は、イングランド147人、フランス781人、スペイン459人、コルシカ36人、ドイツ29人、その他24人であった<sup>[61]</sup>。これだけ圧倒的にフランス系移民が多かったこと、またフランス系移民は母国でも医療や法律など専門職に就いていた知識階層が多かったことから、トリニダードの経済・政治・文化はフランスの影響を強く受けた。当時の新聞の一部はフランス語で出版され<sup>[62]</sup>、法律はフランス語で記述され<sup>[63]</sup>、現在も首都ポート・オブ・スペインのダウンタウンの目抜き通りにはフレンチ・コロニアル形式の建造物が並んでいる。

トリニダードで実質的に奴隷制が終焉を迎えた1838年以降は、東カリブ諸島から流入した自由黒人や、奴隷に代わる労働力として輸入したインドや中国からの年期労働者、またポルトガルからの移民が、ヨーロッパ系白人が領主としてアフリカ人奴隷の労働力を搾取し尽くしながら巨富を築いていたサトウキビ・プランテーション経営を支えた。しかし中国とポルトガルからの労働者は、移住後比較的早い時期からラム酒や日用品の小売店を経営する者が多かった<sup>[64]</sup>とされ、実際には、プランテーション労働に従事するのは、アフリカ系とインド系が大部分を占めていた。

その後1900年前後に現在のシリア・レバノンにあたる地域から、オスマン帝国によるキリスト教徒迫害から逃れてきた人々が移住してきた<sup>[65]</sup>。彼らは、移住当初から布地の行商を行い、次第に布地の小売店を展開し、ビジネスで成功を収めた<sup>[66]</sup>。そして白い肌などの身体的特徴や改宗カトリックであること、裕福であることなどから、ヨーロッパ系白人社会の一員とみなされることもある<sup>[67]</sup>。こうして現代のトリニダード社会には、プランテーション領主層の子孫であるヨーロッパ系白人を頂点とする、人種・民族ごとに分断され、階層化された多民族社会が構築された。

このトリニダード社会の人種・民族ごとの分断を推し進めたのは、トリニダード・トバゴがイギリスから独立して初めて擁立した首相であり「建国の父」と呼ばれるエリック・ウィリアムズである。アフリカ系で西欧帝国主義批判の理論家であると名高いエリック・ウィリアムズは、アフリカ系市民

の植民地支配からの精神的な解放を推進したとして、一昔前までは英雄扱いをされていた。しかし独立後50年経った現在、彼のアフリカ系に特化したエンパワーメント政策は、黒人優越主義者など一部の国民以外には評価は芳しくない<sup>[68]</sup>。なぜなら、アフリカ系と同じようにトリニダードの構成員であるのにも関わらず、ヨーロッパ系白人を迫害し、結果的にトリニダードにおける人種間の軋轢を助長したからだ<sup>[69]</sup>。これはフランス系とアフリカ系の混血であるエリック・ウィリアムズが、強いアフリカ系の身体的特徴を持つことにも要因がある。ヨーロッパ系の身体的特徴を持つ従兄弟は嫡出子扱いを受けたのに、エリック・ウィリアムズは非嫡出子として祖父から財産分与を受けられなかった他、家族として認められなかった<sup>[70]</sup>。「肌の色が黒いがために同等の権利を与えられなかった」という経験と、白い肌に対するコンプレックスが、エリック・ウィリアムズを植民地時代の支配者層であったヨーロッパ系白人に対する徹底的な批判に駆り立てた。

執筆者のフランス系トリニダード人に関する先行研究<sup>[71]</sup>は、植民地時代に領主層であったトリニダードの人口0.02%を占める純血な白人の血統を誇るフランス系市民<sup>[72]</sup>が、現代のトリニダードにおいても文化的・品性的・宗教的・経済的優位性の主張を通じ、植民地時代の白人優越性信仰を現代まで継承していることを明らかにした。さらに自らを、アフリカ人奴隷や労働移民、またイギリス系のような非貴族・非地主系の労働者階層のヨーロッパ系白人と区別するため、フランス貴族の出自と高い教養、またプランテーション所有階層であることに強い誇りを持ち、誰よりも自らの優位性を主張することも検証した。

### 3.5. 白人性とはなにか

人種問題の研究というと、社会の少数派と多数派の関係改善や、少数派の地位改善を視野に入れた研究が行われてきた。例えば、アメリカではアフリカ系アメリカ人や先住民に関する事例<sup>[73]</sup>や、イギリスでは南アジア出身の移民に関する事例<sup>[74]</sup>、フランスではアラブ系の移民に関する事例<sup>[75]</sup>を、白人が多数派として住む社会でどのように白人がそれらの事例に対処し、平和的共生が達成できるのかを副次的な目標として、白人の立場から研究しているものが少なくなかった<sup>[76]</sup>。しかし、それ

らの少数派の事例が発生する原因を作り、事例を問題と捉え、それを問題化するのには、多数派としての白人であり続けてきた。このように近年までの人種研究は、白人が普遍的な存在としての模範として、また基準として、非白人を観察してきた<sup>[77]</sup>。こうして、白人は自らが模範となることで、また自らを基準と設定することで、人種問題の研究対象となつてこなかった。

しかしいくらアフリカ系アメリカ人のアメリカにおける諸問題に関する研究をアフリカ系アメリカ人のみを対象とした研究を続けても、その実情が明らかになるだけである。またオーストラリアのアボリジニの諸問題に関する研究をアボリジニのみを対象とした研究を続けても、彼らの諸問題の詳細が明らかになるだけである。そういった研究では、社会の少数派が社会で直面する問題の解決や、少数派と多数派の共生社会の考究にはつながらない。そこで、その諸問題の解決方法を探るためには、その問題が発生した社会環境の原因となった多数派である白人側の「白人問題」研究の必要性が認識された<sup>[78]</sup>。こうしてアメリカを中心に盛んとなったポストモダン的な白人（性）研究は、オーストラリア、ヨーロッパ、中南米、日本、アフリカ、そしてカリブ海地域にまでその対象を拡大した<sup>[79]</sup>。

本稿で取り上げるバルバドスとトリニダードの白人性に関する先行研究は未だ多くは存在しない。バルバドスに関しては、歴史研究の延長としてベクルズ<sup>[80]</sup>、ジョーンズ<sup>[81]</sup>、シェパード<sup>[82]</sup>などが白人性を取り上げている。トリニダードに関しては、ベッソンの自らの家系を辿ったフランス系の歴史研究<sup>[83]</sup>や、執筆者のフランス系市民の白人性構築に関する研究<sup>[84]</sup>が主なものとなっている。

その白人性の要素の一つとして挙げられるのは、白人は非白人に対し、根拠のない差異を認め、その自らの優越性を信仰し、他方を抑圧しようとする習性を持つ傾向が多いことである。例えば、世界の一部地域では、「黒い肌の人間は白い肌の人間よりも暴力的で非文化的であるため、より優れている白い肌の人間が、より劣る黒い肌の人間に対し、第二市民以下の扱いをすることは許容される」という思考のもと、社会が構成されてきた<sup>[85]</sup>。そして、このような社会構造の中で、常に普遍的な基準である白人が持つ性質、いわゆる白人性は、多くの場合、そこに社会的経済的特権を含むもの

である。さらに白人性は、時代と場所により異なる意味を併せ持つ、流動的な概念である<sup>[86]</sup>。つまり白人というカテゴリーに属す人間とその「白人」が持つ性質は、例えば19世紀のニューヨークと21世紀のニューヨーク、19世紀のニューヨークと19世紀のロンドン、さらには19世紀のニューヨークと21世紀のロンドンでは、それぞれ同質でない。他方、「白人」のカテゴリーに属さないその他の人間は、普遍的な基準としての白人との差異によって、様々な人種や民族のカテゴリーに区分され、階層化されると同時に、白人としての基準に満たない人間として、白人より下層部に属す人間とされた<sup>[87]</sup>。

### 3.6. カリブ海地域の白人性

植民地において、支配者層としての白人が持っていた白人性は、藤川<sup>[88]</sup>が指摘するように、人間の基準として作用し、被支配者層の精神を拘束した。同様に、植民地時代のカリブ海地域においても、支配者層の白人は、道徳的で文化的、知性があり裕福である、そのため到底かなわない存在であると被支配者層が信じるに至った。しかし、先に述べたように、白人であることの属性とその白人性は、時と場所が変われば、まったく異なるものである。特にカリブ海地域においては、誰がヨーロッパ系白人かということは、島ごとの歴史やそれに伴う社会構造の変遷と深く関連している。また白人が非白人との対照としてのアイデンティティである白人性を構築する過程において、異文化との混交が与える影響も島ごとに様々である。なぜなら、島ごとに社会に存在する異文化の要素が異なるからである。そのため異なる過程を経て構築された白人性が、カリブ海地域の島それぞれで異なったものになるのは当然である。

植民地時代のヨーロッパ系白人プランテーション領主は、すべての労働者にとって絶対的存在であった。その「白い人は金持ちで優れていて偉い」という観念は、残影のように価値観として現代社会にも一般的に存在する<sup>[89]</sup>。そのため、有益で良いことである「白いこと」に対しあこがれを抱き、白さを追求する感覚が存在する。それは今もなお、植民地時代と同様に、肌の色を基準とした社会の中での差別や優遇が現実的に存在するためであろう。つまり肌の色が白い方がより美しいとされ、白い方が職場や学校など様々な場面で恩恵を受け

ることができる。そのため、特に女性が肌を化学的に漂白することは珍しいことではない<sup>[90]</sup>。いくら人工的に肌を白くしても、ヨーロッパ系白人にはなれないのだが、肌が白いことで享受することができる恩恵は相当な社会的価値を持っていることは確かである。

とはいえ、完全なヨーロッパ系白人の身体的特徴は好まれないようである。なぜなら植民地時代の支配者そのものの姿だからだ。良いとされるのは、純血のヨーロッパ系白人でもなく、アフリカ系そのものの姿でもなく、限りなくヨーロッパ系白人に近い混血の容姿である。それは、ニュース番組のキャスターやテレビCMに登用されるモデルを見ると明らかである。

現代のカリブ海地域のヨーロッパ系白人は、「真っ白な白人」がいる一方で、明らかに混血の形跡が身体的特徴に見られたり、「白」でも濃淡が見られたりするようになってきた<sup>[91]</sup>。このことから、異人種間の交配が増えていることがわかる。特にバルバドスでは、植民地時代に肌が黒いアフリカ人奴隷と、肌が白いアイルランド労働者が同じ労働をしていたことから、異人種との交流に対する抵抗が比較的少ないため、他カリブ海地域に比べると、植民地時代から混血が進んでいるとの報告もある<sup>[92]</sup>。執筆者は、現地調査の際に、身体的特徴はヨーロッパ系白人そのものであるが、3代前まで遡るとアフリカ系が混血していたり、またその逆で、身体的にはアフリカ系そのものであるが、2代前にはヨーロッパ系白人が混血していたり、見た目では混血の有無が明確ではないことを体験した。

他方、執筆者は先行研究<sup>[93]</sup>において、トリニダードのフランス系白人の一部は白人としての純血性や貴族性を誇るあまり、近年までフランス人やカリブ海のフランス系白人以外とは結婚しなかったことを明らかにした。植民地時代を経験した世代のトリニダードのフランス系白人は、現在は絶対的な人数が少なくなったため、フランス系白人の配偶者をカリブ海地域で見つけることは難しいとは理解していた。しかし、それでもカリブ海地域で由緒正しいヨーロッパ系一族か、フランス本土から配偶者を見つけることがフランス系白人として正しいことであるとの見解を示していた。そこまでして「白いこと」にこだわるのである。

各種統計によると、現在のカリブ海地域に占め

るヨーロッパ系白人の人口割合は、0.06%のガイアナ<sup>[94]</sup>や0.2%のジャマイカ<sup>[95]</sup>、76%のプエルトリコ<sup>[96]</sup>や64.1%のキューバ<sup>[97]</sup>まで、その差は大きい。しかし誰がヨーロッパ系白人であるかという定義は、全世界を見渡しても存在しない。なぜなら厳密に定義するのは不可能であるからである。例えば、プエルトリコの人口調査では、全人口の白人の割合が1910年から1920年の10年間で7.5%も増加し、また1899年から1950年までの51年間では17.9%も増加した「白人化」現象が見られる<sup>[98]</sup>。これはアメリカ合衆国政府がプエルトリコ自治政府に人口調査を行う際に指示した人種カテゴリーの内容変化に起因するものである。プエルトリコにヨーロッパ系白人が大挙して移住を行ったというわけではない。ヨーロッパ系白人と混血していれば身体的特徴が何であれ白人カテゴリーに属することになったり、黒人と白人の混血のカテゴリーである「ムラト」のカテゴリーが廃止されたりしたことにより、必然的に人口調査上は白人の人口が増えたのである。このように誰がヨーロッパ系白人かという問題は、社会的・政治的に巧みに操作されている。よって下記の表1<sup>[99]</sup>では、各々の社会で自らをヨーロッパ系白人であるとする自己申告による数値が現れている。

表1. 人口調査にみるカリブ諸島のヨーロッパ系人口

国・地域	全人口に占める割合	白人人口
バルバドス	2.7	7,893
トリニダード・トバゴ	0.7	7,832
トリニダード島のみ	0.7	7,390
ジャマイカ	0.2	5,981
グレナダ	0.4	4,293
セントルシア	0.6	9,900
ドミニカ国	0.8	5,434
ハイチ	1.4	149,053
セントビンセント・グレナディーン諸島	1.4	1,535
アンティグア・バーブーダ	1.7	1,752
セントキッツ・ネービス	2.1	1,019
バハマ	4.7	15,509
ドミニカ共和国	13.5	1,449,123
キューバ	64.1	7,145,487
プエルトリコ	75.8	2,540,685

このように、誰が白人であるかということについてはカリブ海地域の基準という大枠で語ることはできず、カリブ海のそれぞれの島で誰が「ヨーロッパ系白人」であるかという基準が存在すると考えられる。そのため本稿は、カリブ海地域に住む多様な背景を持つヨーロッパ系白人の白人性は、島ごとに異なり、同一でないという見地に立っている。

#### 4. 現地調査

##### 4.1. 白人性をめぐるオーラル・ヒストリー聞き取り調査

###### (1) 対象

2016年8月と2017年2月にバルバドスとトリニダードに渡航し、それぞれの島におけるヨーロッパ系白人としての経験をテーマに聞き取り調査を行った。聞き取り調査対象者は、3世代以上カリブ海地域に住むバルバドスもしくはトリニダードの18歳以上の男女で、ヨーロッパ系白人であるとの自己認識を持ち、またヨーロッパ系白人コミュニティからも白人であると認識されている人物とした。これは先述の、誰が白人かという問題である。例えば自分が白人であると思う人物が必ずしもヨーロッパ系白人社会においては白人として見られていなかったりすることもあり、そうすると当該人物が社会で経験するさまざまな事柄の語りは、興味深くはあるが、本研究の対象にはなり得ない。

対象者の選別は、バルバドスにおいては海外研究協力者にインタビュー日時調整と共に一任した。トリニダードでの調査に関しては、海外研究協力者として業務委託した人物が突然失踪したこともあり、執筆者が現地に渡航する数日前から渡航中の機内においても、ありとあらゆるコミュニケーション・ツールと人脈を駆使し対象者の選別を行った。

###### (2) 聞き取り調査参加者

本稿で引用する語りを提供して下さった方々は以下のとおりである。下記の表2の名前一覧は、調査参加者が自分自身につけた偽名、もしくは執筆者が調査参加者の匿名が守られるようにあてがった名前である。

表2. 聞き取り調査参加者属性

国	名前	性別	年齢	職業
バルバドス	アマンダ	女	30代前半	会社員
	ダニエル	男	20代前半	アーティスト
	ヘザー	女	40代前半	不動産業
	ジョナサン	男	20代前半	自営業
	ケイト	女	40代後半	自営業
トリニダード	ティモシー	男	40代後半	自営業
	ニコール	女	20代前半	会社員
	ガブリエラ	女	60代前半	観光ガイド
	マイケル	男	50代後半	自営業
	マーサ	女	70代後半	無職

###### (3) 方法

オーラル・ヒストリー手法を用いた聞き取りを行った。本研究をはじめとする白人性に関する調査研究は、その蓄積が浅いことから科学的で数量的な分析を含む量的研究にはなり得ない。しかしながら、各々の植民地時代及び独立後の社会における異文化や他者との交流の経験が、どのように個人の白人性構築に影響を与えてきたか、個人の経験に基づく語りから史実を記録するオーラル・ヒストリーの理論に則り聞き取りを行うことによって「複雑で多面的な現実をたいして、複眼的な視点から歴史を再構築」<sup>[100]</sup>することができ、貴重な質的データの入手が可能である。この理論を用い、同じくカリブ海に生きる人々の研究を行ったのがミンツ<sup>[101]</sup>である。プエルトリコのサトウキビ・プランテーション労働者の過酷な労働や小作農階級の発生課程について、聞き取りを通じて論じた研究は古典的な成果として挙げられる。

聞き取り調査の対象になる可能性がある者には、連絡を取り始めた時から、執筆者の身元を明らかにした。執筆者の人物紹介、執筆者の先行研究の電子データ、また本研究の説明書を電子メールで送付した。説明書には、聞き取り調査にはデリケートな質問事項も含まれること、そのため聞き取り調査により入手したデータは個人が判別されないようすべて匿名で文字起こしされること、音声データは鍵のかかるキャビネットに保管されること、文字起こしされたインタビュー内容は論文や報告書など英語もしくは日本語の文書で発表されることを明示した。送付した文書すべてに目を通し、趣旨を理解して賛同して頂いた者を聞き取り調査対象者とした。

聞き取り調査の実施場所については、執筆者はカフェやホテルのロビーなど公共の場で行うこと

を希望していたが、聞き取り対象者の多くは自宅で行うことを希望した。執筆者は初対面の人物の自宅で二人きりになることに必ずしも賛成できなかったものの、デリケートな内容についての対話を公の場で外国人と行っている場面を現地の知人に見られたくないという調査対象者の感情も理解できたので、貴重な時間を割いてインタビューさせていただき立場から、強く別案を提案することはできかねた。結果としては、大半の聞き取り調査については何事もなく和やかに有意義な聞き取りを行うことができて安堵した。しかし多くの女性研究者がフィールドワークで体験した性的いやがらせを報告しているように、執筆者も聞き取り実施中に数件の事案は経験した。本稿ではその詳細を挙げ、問題提起する予定はないが、女性のフィールドワーカーが研究対象である社会的強者から受ける性的いやがらせについては非常に興味深い研究テーマとなりうると感じた。

聞き取りは、半構造化で一人ずつ45分から1時間を目安に終了するよう計画した。聞き取り対象者の許可が取れた場合のみ、ICレコーダで録音を行った。

#### (4) 主な質問事項

聞き取りがスムーズに進むように、個人の経験を聞き始める前に、家族史についての質問をアイスブレイカーとして必ず行った。聞き取り対象者の緊張がほぐれてから、家の伝統や財産についての質問を進め、教育に対する考えや、学校でのヨーロッパ系や非ヨーロッパ系同級生や教師との関係について聞いた。そしてより個人的な質問内容を続け、今までお付き合いした相手の属性や、子どもの有無、結婚や配偶者の属性について、異人種間結婚と混血についての意見を聞いた。このレベルまで個人的な意見をオープンに答えてくれる関係構築に成功したところで、白人だと初めて認識したエピソードや、アフリカ系・インド系との関わりについて質問を行った。

#### 4.2. 史資料収集

聞き取り対象者の語り内容の補助資料やまた史実の確認のために、聞き取り対象者所有物の家系図、手紙、また写真などを、日本から持参したモバイル・スキャナーを用い、複写を行った。またバルバドスやトリニダードの西インド諸島大学の各図

書館や資料室、国立古文書館や会員制クラブなどの責任者に連絡し、入館許可を取得すると同時に、執筆者が来訪する旨の施設内周知を依頼した。さらに資料閲覧と資料複写への許可を事前に取得した。

#### 4.3. 倫理的配慮

本研究は、聞き取り調査において個人情報を含む質問を行い、時に人種差別や他人に対する嫌悪感など、非常にデリケートな内容の質問を行うものである。そのため倫理的配慮として、研究内容や目的を伝え、聞き取りデータの使用方法を明らかにし、調査参加者の匿名性は完全に遵守されることに對し、インフォームドコンセントを徹底して行った。また研究協力を拒否する権利やデータの厳重な保管方法、データ公表前の研究結果の連絡についても了承を得た。さらに、特別な考慮が必要となるため、未成年者は対象とせず、18歳以上の成人を調査対象とした。加えて、聞き取り調査を実施する光景を他人に見られないように、聞き取り調査を行う場所には特別な注意を払った。

#### 4.4. 困難

貴重な研究費を利用し、時差が13時間あるカリブ海地域へ日本から24時間以上かけて渡航する以上は、滞在期間を有効に使いたい。そのため、執筆者は聞き取り対象者に対し、現地到着前、到着直後、聞き取り調査予定日の前日と、再三のリマインドを行った。しかし、聞き取り対象者の直前キャンセルや待ち合わせ場所に現れないなどによる予定変更を余儀なくされた。

しかし本稿を執筆するための現地調査においての最大の困難は、予定していたトリニダードの現地研究協力者についてであった。現地西インド諸島大学の教員が紹介した身元もしっかりした博士課程在籍の社会人学生が、現地調査日程調整を任せ始めた直後に失踪した。大学に問い合わせたところ、大学にも姿を見せなく連絡がつかないとのことであった。正式に現地調査日程調整を依頼した手前、すぐ他の人に調査協力依頼をすることはできかねた。結局、執筆者本人が個人の人的ネットワークを駆使し、聞き取り調査対象者を選別し日程調整を行ったが、本人からの連絡を待った2週間は非常に長く感じられた。なお当人は数ヵ月後に連絡を寄越し、より厚待遇の別件の調査協力

を行っていた旨説明した。

執筆者の調査前に築いていた現地との深い関わりもマイナスに働いた点もあったように思う。よく知る土地で、調査対象者も執筆者のことを良く知っており、知っているからこそ、建前をとうとうと語る者が多かった。建前から本音を引き出すのに時間と労力を要し、本音を聞きだした聞き取り調査後は、調査対象者の執筆者に対する態度がよそよそしくなった。そして人種差別的発言をする前後には必ず、述べる内容を正当化する発言をした。

#### 4.5. 執筆者の立場

執筆者はバルバドスとトリニダードへの豊富な訪問経験を持っていた。バルバドスには公私合わせて9回の渡航歴があり、現地には数人の友人・知人がいる程度であった。しかし知人の紹介で優秀な現地研究協力者と出会うことができたため、トリニダードよりも格段に効率よく調査をすることができた。

トリニダードは1997年に初めて訪問してから現在に至るまで頻繁に訪れている。2006年には修士論文のための現地調査を行った。2007年から2010年は駐在して生活を送っていたほか、隣国に居住していた2011年から2013年も月に2回は訪れていた。よって執筆者は、トリニダードという土地に精通していると自負している。同時に、現地の関係者にとっても執筆者は定期的にトリニダードを訪問する顔なじみの研究者であり、本研究のために現地滞在中も何かとお世話になった。

### 5. 「ヨーロッパ系白人」とは誰か

執筆者のトリニダードのフランス系白人を対象とした白人性構築に関する先行研究では、対面で聞き取り調査を行ったことのある18歳以上のトリニダードのフランス系白人24名は、全員が白人として純血であることを誇る発言をし、家族系図や写真などを提示しながら自身にはヨーロッパ系以外の混血の可能性はないと発言していた。そこで、執筆者は、バルバドスとトリニダードで「ヨーロッパ系白人」として社会生活を送る研究対象者に対し、自身の家族の歴史やヨーロッパ系白人とは誰かについて、様々な質問を行った。

#### 5.1. バルバドス：『白人』

本稿で取り上げる「語り」の提供者は、自らを白人であると認識し、ヨーロッパ系コミュニティの一員としてその社会で生活してきた者である。またその研究対象者は、執筆者の目には身体的特徴において完全に白人である者のみであった。それにも関わらず、バルバドスでの聞き取り調査を通じて、執筆者が最も驚いたのは、自身は白人であると断言しながらも、自身の混血の可能性を明確にした者が少なくなかったことである。

##### (1) アマンダ 女性 30代前半

「私の父はバルバドスで生まれ育ちました。父方の祖母はトリニダード出身で、父方の祖父はバルバドス出身です。祖母は、トリニダード色というか、肌は茶色っぽくて、髪の毛は暗めの色で、ストレートでした。祖父は白人でした。祖母は、たぶん、インド系との混血なのかもしれません。はっきりと何の混血なのかわからないけれど、浅黒い肌で黒い髪の毛をしていて、たぶんそんな感じだと思います。祖父は白くて青い目をしていました。」

My father was born here, raised here...Umm, his parents, his mother is from Trinidad and his dad is from here, Barbados. She is... granny's... she's more of a Trini colour, more brown, kind of dark straight hair. My grandfather was Caucasian, white.... I would say...my father's mother...maybe some kind of an Indian. I don't know exactly what it is but she has a darker tone to her skin, dark hair-Yeah some kind of something like that. And then my grandfather was white, blue eyes.

バルバドスで行った聞き取り調査の最初の対象者であるアマンダは、自らを白人であると断言した。その上で、バルバドスにおいてヨーロッパ系白人は様々な社会的恩恵を受けやすいと述べ、自分は白人で本当によかったと発言していた。それにもかかわらず、執筆者がアマンダに対し、混血の可能性の有無などについて問う前に、自身が純血の白人ではない可能性を示唆した。特にその事実を隠そうと小声になったりするわけでもなく、自分は白人で本当に良かったとの発言と同じトーンで、自らの混血の可能性を明らかにした。またアマンダが、祖母の身体的特徴から判断する限り、

祖母は混血であると思われるが、祖父は白い肌と青い目という間違いようもないヨーロッパ系白人であると述べた際も、祖父のヨーロッパ系白人の出自を特に強調するでもなく、淡々と事実を述べる姿が印象的であった。これは執筆者の先行研究で示した、トリニダードにおけるフランス系白人のフランス系の純血統を誇る白人性とは異なる「白人」の概念であった。混血でも身体的特徴がヨーロッパ系白人であれば、白人として認識されており、白人としての社会的恩恵も享受することができるという趣旨のアマンダの発言を、執筆者は非常に興味深く聞いた。

また「トリニダード色 (Trini colour)」という言い回しも非常に興味深い表現である。前述のように、トリニダードの住民はヨーロッパ系白人とアフリカ系黒人のみでない。それに対してバルバドスは、イギリス系(イングランドやアイルランド、スコットランドを含む)とアフリカ系が人口の大多数を占める。そのようなバルバドスでは、肌の黒白の濃淡や髪質などの身体的特徴について、よりヨーロッパ系白人の特色が強く出ているか、アフリカ系の特色が強く出ているかで「白人かどうか」を認識する。「混血」をこのように認識しているバルバドス人が、トリニダードにおいてはヨーロッパ系白人やアフリカ系に加え、インド系や中国系、またポルトガル系などの混血が可能であることを認識し、ヨーロッパ系白人とアフリカ系以外の混血の結果が身体的特徴に現れることを「トリニダード色」と表現していることは、カリブ海地域の社会は同質ではないと認識していることが分かる。

## (2) ダニエル 男性 20代前半

次に紹介するダニエルの語りからも、ダニエルが自身の混血である可能性を隠すわけでもなく、混血の可能性を事実として認識している様子が伺える。

「僕の父方はすべてバルバドス人です。・・・僕の父方の祖母はセント・ビンセント島出身だけれど、もっと昔、祖母がどこから来たのかはよくわかりません。祖母はセントビンセントからバルバドスに来た船で唯一の生存者だったそうです。僕はよく知らないのだけれど、僕が知っているのは、僕の祖父はトバゴ島のプランテーションで働いていたということです。僕の祖母は、よそのお宅に住

み込みで、その家庭の子どもの面倒をみていたそうです。僕の祖父はプランテーションの監督をしていたはずで、で、祖母は、私たちが今言うところの『クレオール』、つまり混血だったはずで、で、祖父はトバゴ島からバルバドスに来て、首都ブリッジタウンに住んでいました。言えるのは、父方は混血だということ。混じっています。黒人との混血です。」

My father side are all Barbadian... so my father's mother was Vincentian but we're not actually very clear on that... where she was then. She was the sole survivor on a boat that came across, right? ...I don't know much about it, all I know is that my grandfather was working on a plantation in Tobago. My grandmother... my granny... A lady who lived and took care of others peoples children... my grandfather would have been an overseer. So granny would have been like ahhh, Creole like what we would say Creole would look like ah partially ....mixed up and ahh.. That's what she would've been... and my father side...they would have been from Bridgetown, from over there. All I can tell you, they were mixed blood, mixed up, mixed blood with black.

ダニエルは、バルバドスから 190 km 離れたセント・ビンセント島出身である祖母の家系についての詳細は不明だとし、混血の要素についても知らないようであった。ここで使われている「クレオール」は、カリブ海地域のヨーロッパ系白人とアフリカ系の混血の人々を表現する言葉である。つまりダニエルは、自身の祖母はアフリカ系が含まれる混血であることを「クレオール」という言葉に代えて、婉曲に伝えることで、祖母の身体的特徴と社会的立場を暗示している。カリブ海地域では、ヨーロッパ系白人の身体的特徴が強いクレオールは、二次的ヨーロッパ系白人として扱われてきた。つまり、それほど肌が黒くないクレオールは、ヨーロッパ系白人とまったく同等の社会的特権への完全なアクセスは不可能だが、その一部にはアクセスが可能であることもあり、例えば身体的特徴が完全にアフリカ系であるよりは、社会的信用に基づいた職が得やすかったとされる。

ダニエルのアフリカ系との混血「クレオール」である祖母は、他人の家に住み込みで、その家庭の子どもの面倒を見る、いわば乳母であったと述

べた。20代のダニエルの祖母が自身の子どもを持つ前に住み込みで働いていた1920年代当時、乳母を雇える経済力と社会的背景を持っていたのはヨーロッパ系白人がほとんどであった。その時代、子どもの世話をさせるためとはいえ、他人を自宅に住ませるには、その人物に対して相当の信用が必要であったろう。ダニエルは、クレオールの祖母は決して乳母を雇う側のヨーロッパ系白人が属す社会階層ではなく、彼らのために働く労働者階層であったと示唆した。

さらに黒人との混血であるという家系の祖父はプランテーションの監督をしていたという。執筆者は、プランテーションだと思われる背景で馬に乗るスーツ姿のダニエルの祖父の写真を見せてもらった。混血であると言われても疑問に思うほど、ヨーロッパ系白人そのものの容姿であった。また常夏のバルバドスで、炎天下にスーツを着て、馬に跨ったポーズで写真を撮られる立場であったことを示していた。1920年代の、プランテーションの監督という立場は、プランテーションを所有する領主の配下に複数置かれたポジションであり、主に身体的特徴がヨーロッパ系白人に近い混血の人物が占めていた。つまり、ダニエルが語りの中で伝えているのは、ダニエルの祖父は混血ではあるが、比較的高い社会階層に属していて、プランテーションの労働者を監督する仕事に就いていたということである。

ここで興味深いのは、同じくアフリカ系の混血である祖母と祖父に対して、ダニエルは祖母を「クレオール」という言葉を用いて表現し、祖父をただの「混血」という言葉で表現したことである。旧英領カリブ海地域におけるクレオールの現代の定義を、宗主国出身者とそれ以外の者との間に生まれた混血の人物とその子孫とすると、アフリカ系との混血の家系出身のダニエルの祖父もクレオールである。ダニエルが祖母に「混血」ではなく「クレオール」を用いたのは、おそらく祖母の方がヨーロッパ系白人でない身体的特徴がより強かったのではないかと。つまり肌の色により社会階層が構築されていた当時、住み込みの乳母という職業についていた祖母は、プランテーションの監督をしていた祖父よりも、アフリカ系の身体的特徴が強かったのではないかと考えられる。実際に、今回の聞き取り調査においても、子どもの頃に「ヘルパー」と呼ばれるいわゆるお手伝いさんがいたり、

乳母に育てられたりした記憶がある調査対象者のすべてが、お手伝いさんや乳母は黒人女性だったと述べていた。ダニエルの祖父が混血でも一見はヨーロッパ系白人とかわらないのと同様に、このお手伝いさんや乳母であった黒人女性も、混血であった可能性は十分にある。このことから言えるのは、ある人物が混血か純血かという問題は、身体的特徴による区分が不可能ならば、虚偽の自己申告を行うことも可能だということである。

### (3) ヘザー 女性 40代前半

次に紹介するヘザーも、言いよどむわけでもなく、自身は混血であることを明らかにした。

「私の家族は、アイルランドの血も入っています。そしてスコットランド人やその他も。なんというか、カリブ海は本物の人種のるつぼです。すべての人種がここにいます。時に白人を指すときに、引用符をつけて『白人』といいます。それは混血だということです。私の家族も混血です。私たちは青白い肌をしているけれど、私の父は確実に純血の白人ではありません。父は混血だし、祖父母も、父方の家系は混血です。」

We have Irish blood, in us too. And Scotts and all that. So it was...It's a real melting pot in the Caribbean. Everything is in there. So it was, you know when you put "white" in quotation marks...we are mixed. We maybe pale skin but my father is certainly may not be white, you know. He's mixed and his parents, his heritage is mixed.

ヘザーは、自身は引用符付きの『白人』、つまり混血であるが身体的特徴が白人として通用する『白人』であると認めたものの、アイルランドとスコットランド以外の混血の背景について明言はしなかった。執筆者がアイルランドとスコットランド以外に何が混ざっていると思うかと問うと、「何でも[anything]」という一言の返答だった。確認のために、アフリカ系黒人[African Black]も含まれるのかと問うと、「おそらく[most likely]」という答えをした。ヘザーが「すべての人種」がカリブ海にいて発言したとおりに、確かに世界中からの移民で構成されているのがカリブ海地域の島々である。バルバドスにおいても混血が進んでいることは歴史的また社会的に明らかである。自身の混血

の要素について、「何でも[anything]」という返答で説明を完了させようとしたのはいささか粗放すぎると感じた。

執筆者が、もしかしてヘザーは家系の混血の要素について明言を避けたいのかもしれないと感じたのは、ヘザーの「語り」の始まりから終わりまで、一貫して「アフリカ系」や「黒人」という言葉が出てこないと感じたからである。混血であることを特に隠そうとしたヘザーではないので、この二つの言葉を発することを避けているとは考えにくかった。しかしヘザーから「アフリカ系」「黒人」という言葉が徹底して出てこないで、その理由を聞いた。すると、「特に理由はないわよ。彼らと友達になれるし。[no special reason. I can friend with them...]」とぶっきら棒な返答だった。友達になれるかどうかではなく（ここでの「友達」の定義は不確定）、なぜ「アフリカ系」「黒人」という二語を執筆者との対話の中で発しないのかを質問したのだが、その問いに対する答えは「特に理由はない」であった。

カリブ海地域における混血について話す際に、明らかにキーワードとなる「アフリカ系」と「黒人」という二語ともに出てこないで、あまりに不自然な対話が展開された。それなのになぜその二語が徹底的に避けられるのか。そのため執筆者の関心はそこに集中したが、明確な返答は得られなかった。執筆者の聞き取り技術の未熟さゆえというところもあるが、執筆者には、ヘザーはヨーロッパ系白人以外の混血の要素については、どうしても明言したくないように見受けられた。

ヘザーの夫も純血でない引用符付きの『白人』である。写真を見る限り、ヨーロッパ系白人の身体的特徴しか見受けられないが、引用符が付くことは確かであるという。ヘザーには息子が一人いるが、伝統的にヨーロッパ系白人の子どもが多く通う私立小学校に通わせているという。ヘザーの息子は、青白い肌に緑の瞳をしているが、ブロンドの頭髮に強い巻き毛が出ており、混血だということが一目瞭然だ。息子の青白い肌は陽に焼けると褐色になりやすいそうで、長期休暇のあとには、ヨーロッパ系白人の骨格に褐色の肌と緑の瞳、そしてブロンドの巻き毛が加わり、「完全なるカリブ海人[The perfect Caribbean]」になるという。息子のヨーロッパ系白人の学友の多くも、何かしらの拍子に混血の身体的特徴が表に出てくることがあり、

「バルバドスには純血のヨーロッパ系白人なんていないと思う。[I don't think there are many of pure whites in Barbados.]」と述べていた。

ヘザーは、自身は純血でなく引用符付きの『白人』であると理解しているし、純血のふりをするわけではないが、バルバドスはもとより、欧米でもヨーロッパ系白人でいる方が明らかに「楽(easy)」だと発言した。続けて、「マイアミ(国際空港)の入国管理でも、白人は早く通してもらえるけど、黒人にはたくさんの質問を浴びせるし。白人と非白人に対する扱いは明らかに違うと思わない？ [Even at the immigration at Miami (International Airport)... immigration officers let white people pass fast and they pour bunch of questions to black people. Don't you think it is obvious? They treat white people and non-white people differently. Totally.]」と執筆者に同意を求めた。執筆者は、自身の経験から反射的に強くなずいた。同時に、圧倒的にアフリカ系人口が多いバルバドスでもヨーロッパ系白人の方が楽、つまり生きやすいと明言したヘザーが、なぜ「アフリカ系」と「黒人」という言葉を避けて自らの混血の背景を説明するのか、漠然と推測できた気がした。非ヨーロッパ系だと、そして特に「アフリカ系」「黒人」だと、また「アフリカ系」や「黒人」との混血が明らかな身体的特徴を持っていると、人種差別や偏見がもたらす不都合が多い世の中だからである。

#### (4) ジョナサン

次のジョナサンは、混血であること、またアフリカ系の血も混じっていることを明言した。その発言は父方・母方両方の祖父母が行った遺伝子検査の結果に基づくものであり、混血の事実は疑いようのないことであった。しかし同時にジョナサンは、自身が白人だということを疑っておらず、それどころか意図的に「白人となるため」に親族に用意された教育や環境によって、ますます「白人である」という認識は強くなっている、と語った。

「僕の母はトリニダード人両親のもとに、トリニダードで生まれました。そして祖先がトリニダードへどこから移住してきたかですが、,, フランス、スコットランド、アフリカ。そうですね、祖先がトリニダードに来る前、1800年代前半まで家系を辿ることができます。僕はここバルバドスでは

白人だと認識されますが、他の国ではそうはいかないと思います。本当に変なことだけれど、僕は白人であることを強化されました。つまり、僕は白人になるように育てられて、自分が白人であるという認識と、他の人が僕は白人だと言うことと、僕が自分自身に自分は白人だと言いきかせることが、僕を白人にしています。だから僕は白人なんです。僕の家系を辿れるところまで辿ると、僕は白人だということに疑いはないですが、同時に僕の父方母方合わせて四人の祖父母の遺伝子検査の結果によると、僕は80%がヨーロッパ系で、その他20%がインド系と先住民とアラブだということも知っています。」

My mother was born in Trinidad to both Trinidadian parents. So before Trinidad, so they came... the French, Scottish, Africans. Ah, yeah, I can trace back to before they came to Trinidad. So like 1800s..early 1800s. because I'm considered white here before but in other countries I might not. But it's a real weird thing, you know. It was reinforced that I was white. I was raised to be white whatever that means, with that consciousness, ah, other people said I was white and I said I was white so that makes me white. I'm white, yeah. I know because of the family history. I also know some genetic history as well on my four grandparents. So I know that I am 80% European. And 20% Indian, Native American and native Caribbean... and Arabic.

ジョナサンの語りの興味深い点は、自身が白人であると社会で認識されていることを客観的に分析していることだろう。ジョナサンも他の聞き取り調査対象者と同じ様に、身体的特徴はヨーロッパ系白人そのものである。しかしジョナサンはバルバドス以外では自分は白人と認識されないのではないかと疑問を呈している。ジョナサンは、1800年代前半まで辿れる祖先の家系はヨーロッパ系白人であり、遺伝子検査の結果によると大部分はヨーロッパ系白人であるが、インド系と米州先住民、また中東の血も入っているという。

ジョナサンが疑いもなくヨーロッパ系白人であるという背景には、ジョナサンの生い立ちに関係する。ジョナサンの両親や祖父母は、ジョナサンにヨーロッパ系白人としての人生を送らせるため、ヨーロッパ系白人コミュニティの中で家族ぐるみ

の付き合いをし、ヨーロッパ系白人が多く通う学校で教育を受けさせ、放課後もヨーロッパ系白人の子弟と遊ばせた。こうしてジョナサンはヨーロッパ系社会の中で育ってきたという。両親や祖父母より幼い頃から暗黙のうちにヨーロッパ系白人だと刷り込まれてきたこと、それにより自身でヨーロッパ系白人だと認識してきたこと、そして他人がジョナサンをヨーロッパ系白人として扱い、自分自身で自分はヨーロッパ系白人だと言い聞かせることで、ジョナサンはヨーロッパ系白人としての自覚、認識が強化され、疑いのないヨーロッパ系白人になったと述べた。このジョナサンのヨーロッパ系白人としてのアイデンティティ、いわゆる白人性は、ジョナサンが置かれた環境と家族や友人を含めた周囲の人々により、人為的かつ意図的に強化されたといっても過言ではないであろう。

バルバドスでの聞き取り調査を行った対象者で、ジョナサン以外に遺伝子検査を受けて、先祖の出身を人種・民族レベルで知る者は何人か存在した。約1万円の代金を支払い、口の中を綿棒でこすり、プラスチックの試験管に入れて、欧米の遺伝子検査会社に送り返してまでして、遺伝子検査を決意する者の多くは、自身の混血の事実を知らなかったそうである。一人だけ、ヨーロッパ以外の先祖を持っていない者、つまり「純血の白人」がいたが、多くの遺伝子検査経験者は、思いがけない自分の祖先を知ることになったそうである。ジョナサンの祖父母がいつ自身の混血の事実を知ったのかは不明だそうだが、バルバドスにおいては混血であるが『白人』として認識されるジョナサンは、その事実に基づいて、ヨーロッパ系白人になるように育てられ、それを自ら認識している点が非常に興味深かった。

##### (5) ケイト 女性 40代後半

バルバドスのみならず、カリブ海地域の多くの島々では、ヨーロッパ系白人と植民地時代の富の搾取を結びつけ、ヨーロッパ系白人を一括りに、様々な社会的特権を持ち豊かな生活を送る存在という目で見る非ヨーロッパ系の人々が少なくない。しかし、次のケイトは、その一括りにされるヨーロッパ系白人の狭いコミュニティの中でも階層が存在することを明らかにした。そしてケイトは、自身は純血なヨーロッパ系白人であると述べなが

らも、ジャマイカ出身の母方の家族の白さには濃淡が存在すると発言した。

「バルバドスは階層差別よりも白人と黒人の人種差別の方が一般的だと思う。例えば、昔の支配階層出身のお金持ちの白人がいるけど、私たち家族はその人たちと同じレベルの上流社会の輪には入っていないと思う。その白人の友達たちの両親がパーティーを開くときは、うちの両親たちは招待されなかったもの。彼らは、私たちは違う、と感じているんだと思う。そう、だから私たちは白人で、純血な白人だけれど、同時に、父が白人のジャマイカ人である母と結婚したことが大きな違いのものなんだと思う。例えば、母の白人の家族はポルトガルやドイツ出身の先祖もいて、とても違う感じでした。母方の家族は同じ白でも、色々な白をしていました。私の母は黒っぽい髪と目をしていましたが、私はブロンドで生まれました。叔母はブロンドで青い目をしていて、私もその叔母そっくりに生まれました。私の母も白人でとても青白い肌をしていましたが、私の叔父は真逆でした。叔父は家族の中でもっとも黒くて、黒っぽい髪と目をして、黒いひげを生やして、浅黒い肌をしていました。」

I definitely think Barbados have a black white thing more than a class thing... So I think that there was that kind of the plantocracy white, extremely rich white, but as I said we definitely weren't in the same social circles as ah, my other friends' parents who had parties together. My parents, I would notice that they didn't get invited to certain things. So yes, we were white and we are pure white but I also think, that my father marrying a Jamaican woman, I think that, yes she was white but ah, if you had seen her family, because of all the mix of Portuguese and Germans, ah, my mother's family are actually quite different. They range in color in terms of white, so she had dark hair and dark eyes and whereas my grandmother was obviously blonde, my father was dark haired but I came out blonde. I came out like my grandmother's youngest...She was blonde hair blue eyes and I came out looking like her, right. So my mother was white and very pale, paled skin but yet my uncle, the last boy, he's the opposite. He's the darkest of the family. Dark hair, dark eyes, dark mustache and dark skin.

本稿では、ケイトの母の出身地で、バルバドスやトリニダードと同じく旧英領カリブ海諸島の一つであるジャマイカについての歴史的・社会的背景は触れないが、ジャマイカも多民族が共存する社会である。そのジャマイカにおいても、現代のヨーロッパ系白人コミュニティに関する社会研究は活発には行われていない。数少ないポルトガルやドイツ出身の移民に関する歴史研究<sup>[102]</sup>によると、ドイツからジャマイカへの移民は1830年頃から始まったとされる。そして現在のドイツ系ジャマイカ人は3世代目もしくは4世代目であり、現地のヨーロッパ系白人以外との混血も進んでいるとされる。ケイトは自身を「純血な白人」と表現しているが、「同じ白でも、色々な白をしていた」というケイトの母の家系からすると、混血の可能性は否定できない。ケイトは、この語りの中で自身のヨーロッパ系白人としての純血性を主張しているものの、同時に自身の混血の可能性についても大いに認識しているようである。

さらにケイトは階層差別よりも人種差別の方が一般的だと発言するが、彼女の語りはバルバドスのヨーロッパ系白人社会に存在する階層を示すものだった。上流階層のヨーロッパ系白人がケイトの両親をコンスタントに会合へ招待しないということは、彼らはケイトの両親には上流社会に属する人種的・経済的・社会的属性がないという認識の表れであろう。またケイトの両親も自らは上流階層には属しないとの認識を持つのかもしれない。ケイトの両親があえて上流階層に属したくないと考える可能性もあるが、植民地時代の肌の色による社会階層に応じて配分される富や機会を放棄することと同義であり、非現実的である。ケイトの語りは、国土が小さいバルバドスにおける、小さなヨーロッパ系白人社会にも、混血の有無、父祖の職業、現在の職業、現在の経済力などによって、細かな階層があることを暗示した。

再度となるが、これらの語りはすべて、バルバドスでヨーロッパ系白人としてのアイデンティティを持ち、ヨーロッパ系白人としてバルバドスで生活を送る対象者から聞き取ったものである。ここで興味深いのは、自らをヨーロッパ系白人だと名乗りながらも、隠すわけでもなく、自身の混血の可能性を明らかにするヨーロッパ系白人の存在であろう。また白人としての純血性を公言しながらも、ヨーロッパ系以外との混血を示唆した者も

いた。

このようにバルバドスにおいては、誰がヨーロッパ系白人かという問題は、身体的特徴がヨーロッパ系白人であれば、実際の血統が何であれ、ヨーロッパ系白人として認識されるようである。さらに、混血の事実が明確でも、身体的特徴がヨーロッパ系白人であれば、周囲からヨーロッパ系白人として扱われ、自身も白人を名乗ることができるようである。例えば、先述のジョナサンは自身が通った小学校の校長について語ったとき、「校長先生は白人女性だった、そう、混血の女性…。[The principal was a white woman, a mixed-race woman….]」と表現した。執筆者としては、その校長は「白人」と「混血」の一体どちらなのだと問いたくなった。しかしバルバドスにおいては、混血であっても身体的特徴がヨーロッパ系白人であれば白人として認識されているのだろうと理解した。今回の聞き取り調査で、混血を明らかにしたヨーロッパ系白人の中には、混血の事実を隠そうともせずに明らかにする者と、その事実を明言はしないが示唆する者と、その事実も認識はしていないようであるが状況から混血は明らかなる者と様々であった。

ここで忘れてはならないのは、本稿のバルバドスにおいて誰が白人かという問題は、バルバドスのヨーロッパ系白人への聞き取りから得る彼らの自己認識と同属意識、その同属意識がどのような要素から構成されているかであって、非ヨーロッパ系白人が誰をヨーロッパ系白人として認識するかとは別の問題である。現地調査中に会った、自らをアフリカ系と称した人物は、執筆者がバルバドスのヨーロッパ系白人にインタビューをしに当地を訪れているとの発言に、「ヨーロッパ系白人なんてここに存在するの？彼らは白く見えるけど、本当はそうでもないんだよ。みんな混血だよ。[Do they exist here? Yeah...they look white, but not quite...Everybody is mixed.]」と笑いながら言ったのをここに記録する。

## 5.2. トリニダード

現代トリニダードの社会構成は前述の通りである。トリニダードのヨーロッパ系白人コミュニティは、一言でヨーロッパと言っても、フランス貴族の子孫や、イギリス商人またはイギリス植民地政府役人の子孫、ポルトガル農業移民の子孫など、その背景は様々である。執筆者の先行研究は、フ

ランス系トリニダード人はヨーロッパ系白人としての純血を誇ることを明らかにした。今回、フランス系と限定せず、トリニダードにおいて広くヨーロッパ系白人として生活する者たちに聞き取りを行った。すると、混血の事実を認めながらもヨーロッパ系白人であると述べるバルバドスとは違い、混血について触れる者は一人もおらず、自らをヨーロッパ系白人であると発言する者しかいなかった。

### (1) ティモシー 男性 40代後半

生粋のフランス系であると主張するティモシーは、両親や祖父母、またその前の代もフランス系であると述べた。そのようなティモシーの語りでも印象的だったのは、異人種間結婚に対する嫌悪であった。

「母方も父方も、両方ともフランスから来ました。たぶん4世代前です。4世代、僕たち家族はここにいます。僕たちは生粋のフランス系です。他のカリブの島々と違って、トリニダードの人たちは、生粋のヨーロッパ系です、いいえ、『でした』ですね。世の中は変わりつつあり異人種間結婚なんかが流行っているから。でも僕たちは本物の生粋でした。」

My mother side and father side, both are from France.... Probably 4 generations ago...let me count... yeah...four. Four generations, we are here. We are straight from France. Not like other islands, people here are...well, were, ...because we are changing, mixed marriage and stuff, ...but we were very genuine....

ティモシーは、ティモシーの父親も学んだフランスの伝統的な寄宿舎で、8歳から教育を受け、フランスとイギリスの大学で学んだ。長期休みのたび、毎年数ヶ月間はトリニダードに帰省していたという。フランスとトリニダードとどちらに強い愛着を感じるかと聞くと、トリニダードと即答したのが印象的であった。

ティモシーは、トリニダードは他のカリブ海諸島のように混血が進んだわけではないので、生粋のヨーロッパ系白人が存在していると発言した。興味深いことに、これはバルバドスでトリニダードの混血ぶりを指摘したアマンダの「トリニダード色 [Trini colour]」という発言と相反する。そして

生粋のヨーロッパ系白人が存在するトリニダードにも、異人種間結婚の流行が到来しており、すでに純血のヨーロッパ系白人は珍しくなっているとの考えを示した。異人種間結婚を言及したときにティモシーが見せた嫌悪は相当のもので、執筆者はヨーロッパ系白人、特に「生粋のフランス系」の血統を守りたいという、ティモシーの強い願望を感じた。しかし現実的には、異人種間結婚は一時の流行ではなく、グローバル化が進み、人の移動が盛んになった結果であり、現代社会では異人種が出会い結婚するという流れは自然である。ちなみにティモシーは、父親がティモシーを連れてフランスに赴き、いわゆるお見合いをして、そのときに出会ったフランス人女性と結婚し、トリニダードに住んでいる。結婚前の話として、親密な交際をしたヨーロッパ系白人でない相手はいるか聞いてみた。

「・・・誰に恋に落ちるか、誰に魅力を感じるかということは、自分ではコントロールできないことだと思っていたよ。子どもの頃、祖父のプランテーションで働く労働者の子どもたちと遊んでいたからかもしれない。まあ、カリブ海出身だし。ヨーロッパから出たこともないフランス人とは違う嗜好があった気がする。フランスでもイギリスでも、カリブ海出身の混血の女の子に惹かれる傾向は確かにあった。黒人ではないんだ。黒人と付き合うことはタブーだったんだ。当時は、僕が魅力を感じる女の子は全員いい具合の混血だった。美しかった。本当に綺麗な女性だった。それでも父親に何をしているんだと怒られたこともある。父は僕が混血の女の子をデートすることに反対だったんだ。そんな愛の物語がたくさんあって、まあ、見てよ、こうやってもう既婚者になったよ。妻はいい家族を築くための最高の結婚相手だと思うよ。」

...you know, when and who you are falling in love, or who you are attracted to is something you cannot control. That was what I thought. It may be because I was running around with kids of the workers at my grandfather's plantation, you know.. but I am from the Caribbean. That is what I cannot change. I think I was attracted to someone who my friends in France would never ever fall in love with. Their world is all about Europe, you know.... Ah, even when I was in England or France, I was always attracted to someone from the Caribbean with mix background. They were not black. Dating with black girls

was...ah... big NO at that time. Girls who I was attracted to were always of a great mix. Beautiful. So beautiful. I was not dating any black girls, but still, my father was not happy,... and ah... sometimes he called me up and said "what are you doing?!" He was not happy at all, me dating a mix girl... So a lot of love dramas, but see? I am a married man now. My wife is the perfect partner to build a family...

現在フランス人女性と結婚しているティモシーは、イギリスでもフランスでも混血の女性に惹かれることが多く、混血の女性とお付き合いをすることが多かったという。それにも関わらず、あからさまに示した混血に対する嫌悪はとても不可解である。ここでティモシーは、お付き合いしていた女性たちは混血だけれども、決して黒人ではなかったと強調している。当時、黒人と白人との交際はタブーだったという。それ以上に、ティモシーの父は、自分の息子が、黒人でなくとも、混血の女性と交際することも気に入らなかったようである。興味深いのは、ティモシーと父親の、交際する女性に関する属性の許容が異なる点である。ティモシーにとって、黒人ではない、黒人には見えないが混血が明らかなカリブ海出身の女性は、交際相手として許容範囲内であるどころか、理想であった。しかしティモシーの父親にとって、黒人との混血がわかる混血女性は、息子の交際相手として許せるものではなく、白いフランス人女性との交際を勧めた。そういうことを経験した青年期に、多くの混血女性との交際を経て、ティモシーが人生の伴侶として選んだのは、父親が用意したお見合いで出会った、父親のお墨付きの、家族を築く相手としては最高のフランス人の白人女性であった。

惹かれる対象というのは、身体的特徴やその人が育ってきた文化も含めて、人それぞれ違うであろう。ティモシーはカリブ海系の混血の女性に惹かれることが多く、比較的自由に恋愛を謳歌した。しかし、それと同時に、フランス系トリニダード人としての自分の役割を認識していたのであろう。お付き合いすることと、子どもを作り、家庭を築き、家を継ぐことは違うということ、また子どもの教育方針や家の相続問題などが絡むため、結婚とは自分自身だけの問題ではないことを、理解していたようである。自分は長男であり、トリニダ

ードとフランスにある家族の財産の大部分を相続する立場であること、またフランス人女性を結婚相手に選び「生粋のフランス系」である家系の伝統を絶やさないようにすることも、自分の重要な役割であると認識していた。

ティモシーによると、両親にとってティモシーの4歳年上のお姉さんの結婚相手探しは頭痛の種だったという。多くのフランス系のみならず、ヨーロッパ系白人がトリニダードから欧米へ移住してしまい、トリニダードに「良い種の男 [man of good species]」が存在しなくなってしまったからという。言い換えると、トリニダードには「良くない種の男」である非ヨーロッパ系ばかりになってしまったから娘の結婚相手を探すのに苦勞をしたとのことである。結局、そのティモシーのお姉さんは、カリブ海の仏領マルティニークのフランス系旧家の次男と結婚し、現在はフランスに住んでいるという。なおティモシーの3歳年下の弟は、幼少のころよりフランスの寄宿舎に通い、フランスの大学で出会ったフランス人の友人の妹と結婚し、フランスとトリニダードを行き来する生活をしているそうだ。

ティモシーの父はフランスにも土地を持つということ、ティモシーがフランスに移住する希望や計画はないのかと聞いてみると、「自分はフランス系トリニダード人であって、フランス人ではありません。自分の場所はここです。フランスに住むことにはまったく関心はありません。[You know, I am a French Creole, but I am not French. My home is here, you know. I have no interest in living in France.]」という返答であった。それはティモシーの語りの「4世代、私たちはここにいます。[Four generations, we are here.]」に表れているように、トリニダードへの愛着の強さを示している。

## (2) ニコール 女性 20代前半

次のニコールの語りからは、トリニダードの社会におけるフランス系とイギリス系の違いが読み取れる。ニコールは母方がフランス系で父方がフランス系とイギリス系の、金髪碧眼のヨーロッパ系白人の女性である。上記と同様に、混血の可能性について聞いたところ、「まさか! [no way!]」という一言で回答が終了し、以下の語りを展開された。

「私の母方はフランス系です。カトリックのフランス系です。祖先は首都に出てくる前はトリニダード南部に住んでいました。そして私の父方はフランス系とイギリス系です。イギリス系と言っても、商人ではなく、コーヒー、カカオ、かんきつ類などのプランテーションを所有していました。みんな、ここで生まれました。」

My mother side is French... Catholic French... They were based in South, before they moved to town... and my father side is French and English... not merchant English, but they had land... coffee plantation and cacao, and citrus and stuff... everybody was born here.

フランス系の影響を強く受けていると思われるニコールは、執筆者のフランス系トリニダード人の白人性に関する先行研究が明らかにした、フランス系トリニダード人の特徴をそのまま持っていたことが興味深かった。それは、生まれた場所がトリニダードであること、カトリックであること、またプランテーション所有階層出身であることを指す。また「みんな、ここで生まれました。[everybody was born here.]」という発言から、何代にもわたって家族がトリニダードで生活していることを示し、それがトリニダードに対する愛着であること、「本物のトリニダード人」であるという主張をしている。

トリニダードのイギリス系に対しては、一般的にイギリス本国から送られる植民地政府役人や、彼らの生活を支えるイギリス物資をイギリスから輸入する商人の子孫であるとの認識がある。そのため、トリニダード移住直後からプランテーションを所有・経営するフランス系とは異なり、一概にイギリス系は労働者階層とステレオタイプとして見られることが少なくない。しかし、イギリス領トリニダードでプランテーション経営を行い、莫大な利益を上げているフランス系にならない、プランテーション経営を始めたイギリス系も存在したことは確かである。そのためニコールは、自身のイギリス系の家系がどのような形でトリニダードに移住してきたかは不明だとしながらも、彼らはプランテーションを所有する階層に属していたことを明確にした。

トリニダードのヨーロッパ系白人社会には、伝統的にはその中でも階層があり、その頂点は植民

地時代から広大なプランテーションを所有していたフランス系が占めていた<sup>[103]</sup>。そして商人や植民地政府の役人だったイギリス系や、小売業に従事していたポルトガル系が、その社会階層の下部に続いていた<sup>[104]</sup>。21世紀の現在も、ニコールは父祖の出自を明示し、ヨーロッパ系白人社会の階層を強調するが、執筆者は、現代トリニダードのヨーロッパ系白人社会の中が顕著に階層分けされているとは考えていない。なぜならヨーロッパ系白人社会の中の階層が顕著であったであろう植民地時代と比べ、自身の白人性を保つため、ヨーロッパ系白人社会の中での宗教や社会階層の違いに厳格でない婚姻が進んだほか、欧米への移住などでその人口自体が激減し、ヨーロッパ系白人社会自体を維持することだけで精一杯だったと考えるからだ。特に1970~80年代、アメリカの公民権運動の余波として、ブラック・パワー運動がトリニダードに上陸してからは、ヨーロッパ系白人は自らの社会的経済的特権を死守すべく、階層にこだわらずに一丸となっていたはずである。つまり、非ヨーロッパ系の人々に悪として攻撃されている中、植民地時代の古い価値観を持ち出し、ただでさえ絶対数が少ないヨーロッパ系白人社会を社会階層により分裂させたくはなかったであろう。そのような時代背景をよそに、ニコールはプランテーションを所有する上流階層の家系であると強調することを忘れなかった。それはやはり、ニコールの認識の中に、一般的にはイギリス系は労働者階層であるという、ヨーロッパ系白人社会の階層についてのステレオタイプ的な認識があったからに他ならない。

### (3) ガブリエラ 女性 60代前半

次に紹介する「ほぼイギリス系」だというガブリエラは、上記ティモシーとニコールのように、トリニダードに何代続く家系であるとか、父母・祖父母の職業は何であったかとかいうことには一切触れずに、自身の家系の背景を紹介した。

「私たちの家系はほぼイギリス系です。少しスペイン、フランス、ベネズエラ、ポルトガルの血が少しどこかで入っているけれど、私たちは白人です。私たちは白人だったというべきかしら。私の甥は、中国系の女の子と同棲しています。とても良い子です。だから私たちの家系に中国の血がすぐに入るかもしれません。とてもいい子で、浅黒い肌を

持つ中国系の子ですが、決して黒人でもインド系でもありません。」

We are mainly English.... Some in the line, there are some Spanish, French, Venezuelan, and Portuguese, but we are white.... We were white... my nephew are now living with a Chinese...well, local Chinese girl...nice, nice girl... so we may have Chinese in us soon. She is nice, she is a local Chinese, with a dark tone of skin, but not black or Indian...

ヨーロッパ大陸にはない南米ベネズエラの血が入っていても白人であるとの発言だが、ベネズエラの歴史や民族構成を見ると、スペインの血が強い人々の存在がある<sup>[105]</sup>。そのためガブリエラの語りに紹介されるベネズエラ出身者は、スペイン系の身体的特徴を持つ人物なのであろう。ガブリエラは、自身の家系をヨーロッパ系白人であると述べたが、甥と中国系の女性が同棲しており、近いうちに子どもができる可能性があることを発言した。嫌悪や拒否感などを表すこともなく、淡々とヨーロッパ系白人の甥と浅黒い肌を持つ中国系トリニダード人との間に子どもができたなら、家系に中国系の血が入ったことになり、家系が「白人だった」という状況になるだろうと発言した。

執筆者は、甥が混血の子どもを持つかもしれないことについてどう思うかと聞くと、「今のこのグローバルな社会では、白人としか結婚できないとは言えない」、「今の時代、結婚を反対したら、子どもが親から離れていってしまう」と発言した。反対はしないけれど、決して手放しで喜ぶ結婚ではないようである。しかし執筆者は、甥と中国系の女性との結婚について聞いたのではなく、彼らの混血の子どもが生まれることについてどう思うかと聞いた。またガブリエラも、甥が中国系の女性と結婚するかもしれないと述べるのではなく、「中国の血が入るかもしれない [we may have Chinese in us]」とだけ述べたはずである。ここで執筆者は、先行研究で紹介した、たとえ自分の息子と非ヨーロッパ系女性との間に子どもができて、非ヨーロッパ系女性と自分の息子との結婚は望まないと明言したある母親の語りを思い出した<sup>[106]</sup>。ガブリエラも、その「とてもいい子」で「浅黒い肌を持つ中国系の子」について、「黒人でもインド系でもないことを強調した上で、その子と甥との間に混

血の子どもが生まれる可能性については明言したが、その二人の結婚の可能性については口を濁した。そしてその可能性を明言する代わりに、一般論として、異人種間結婚を受け入れなければいけないと理解していることを婉曲に表現した。

ヨーロッパ系白人の甥と中国系トリニダード人との間の混血の子どもについて、ガブリエラは、「今はどんな人でもいい生活が送れるから大丈夫 [It is ok...because any kind of people could have a good life these days]」と言いながらも、決して積極的に歓迎する選択ではないと感じさせる。ここでの「どんな人でもいい生活が送れる」について、ガブリエラの真意を確認してみた。すると以下のように発言した。

「私が子どもの頃は、どの分野でも白さが成功の条件だった。けど今はどんな人種でも成功していい生活を送ることができるチャンスはあるように思う。」

When I was little, if you want to be successful in any kind of field, you have to be white. You got to be white, you know.... But, now, I think any kind of people, no matter if you are white or black, or mixed, if you try hard, you can be successful and have a good life.

ここでのガブリエラの「いい生活」とは、衣食住に事足り、子どもに良い教育を受けさせることができ、きちんとした仕事に就いていることだという。ヨーロッパ系白人と中国系の混血の子どもも、私たちヨーロッパ系白人と同じ様な「いい生活」が送れるような世の中になったから大丈夫という含意を持つ語りから、ガブリエラはヨーロッパ系白人であることは様々な面で社会的に有利であることを認識していることが明らかである。さらにガブリエラは、現代のグローバル化が進んだトリニダードでは異人種間結婚と混血が増え、ヨーロッパ系白人の絶対数が減ったため、社会が変わったこと、そして家系が白くなくなってしまうことは本意ではないことを暗示し、混血であっても徹底的に不利になることはない社会になったから仕方がないという感覚を持っていることを示した。

#### (4) マイケル 男性 50代後半

次のマイケルは、トリニダードでは名高いフランス系の出身である。フランス系は、フランス系同士で結婚することが多く、1970～80年代頃までは、従兄弟・従姉妹同士の結婚が珍しくなかった。これは白人としての純血性を守るため、またフランス系であることを守り抜くためであった。しかし近年、その慣習は近親婚の悪影響が子どもの心身状態に出ることが明らかになってきている。また70年～80年代に盛んになったブラック・パワー運動の結果、ヨーロッパ系白人の社会的優位が脅かされるようになり欧米への移住が進み、フランス系も含めた全体的なヨーロッパ系白人人口が激減した。そのため、フランス系の人々は白さを保つためだけに、結婚相手をフランス系に限定しておられず、広くヨーロッパ系白人との結婚も認めざるを得なくなったといういきさつがある。マイケルは、父方は祖父母の代までは完全なフランス系と認めた上で、自身が結婚を決めたときの親族の反応を披露してくれた。

「僕とミランダが結婚を決めて、結婚式の招待状を用意していたとき、もちろん僕のおばさんたちは、マイケルが結婚するかわいい子は誰かしら、って知りたがっていたんだ。で、ミランダの苗字を見て、\*\*\*\*\*?それってフランス系の苗字じゃないわよね。彼女は何者?何をしている人?って騒いだらしい。僕に向かって言ったんじゃないで、また聞きだった話題は、ミランダがちょっと黒すぎるって。アフリカ系との混血ではないのに。そう。だからそういったことを気にする人の疑問はあったよ。なんというか、そういうことを問われるなんて、予想していたとは言わない。でも僕の家族の中だけだったら、それまでそういうことを気にすることはなかったから、ショックを受けた。僕の姉さんやお母さんは、黒かったり、インド系だったり、混血だったりする色々な友達がいまし。だから僕はちょっとショックを受けた。僕とミランダは笑い飛ばしたんだ。ミランダも笑い飛ばしたよ。ただ馬鹿げていると思った。そうだね、僕は、なんというか、なんだこれは?と思っただし、馬鹿な白人たちだと気にしないことにした。今でも単純に、馬鹿げてると思うよ。」

...when we decided we were going to get married and give out invitations, of course my aunts wanted to know who is this lovely girl that Michael is getting married to, [family name]? That's not a French Creole name, what is she, who is she?

There were comments brought back to me, I didn't hear it first hand, that they thought that Miranda was a little too brown. But she's not... So yes there was a little question as to that. That was actually, I won't say expected, I was shocked because that doesn't happen in my family, in my immediate household, that doesn't happen. My sisters and mother always had friends that were dark, Indian people, red, whatever you want to call them. So I was a little shocked, we laughed it off, Miranda laughed it off. It was just silly. Yes, I was a little bit..., what the hell is this and I brushed it off as stupid White people... I just think it was silly...

中国系とポルトガル系の混血であるミランダと結婚を決めたマイケルは、一部の親族がミランダの苗字からフランス系でないことを悟った上で、ミランダの肌の色が少し黒すぎる、つまりアフリカ系との混血でないかと疑っている者がいることを人づてに聞いたという。マイケルは、自身が育ってきた家庭では人種差別や人種に対する偏見がなかったから、自分が選んだ妻に対し、彼女の肌の色が原因で出自を知ろうと大騒ぎする親族に驚いたという。そしてマイケルは、その親族の騒ぎぶりを無視し、そんな騒ぎは全然気にならないと述べ、妻の肌の色が黒すぎるかどうかで大騒ぎする親族を「馬鹿な白人 [stupid white people]」と呼んだ。

しかし、である。マイケル自身で、自分には人種差別や偏見はないと何度も発言してきたが、自身の妻になるミランダが、親族にアフリカ系との混血を疑われたエピソードの中では、まっさきにアフリカ系との混血を否定している。本当に人種差別・偏見がないのであれば、アフリカ系との混血の可能性を、もしくはミランダの肌が少し黒すぎることを、否定する必要はないのではないか。執筆者には、中国系とポルトガル系の混血であるミランダは、純血のヨーロッパ系白人には見えない。執筆者はミランダのポルトガル系の父親と長年にわたり懇意にしているが、彼は茶色い髪に青い目をしていて、いわゆるヨーロッパ系白人の身体的特徴を備えている。ミランダがヨーロッパ系白人には見えない理由としては、確定的なアフリカ系やインド系の身体的特徴を所有しているわけではないが、顔立ちや肌の色が、たとえば本稿で紹介し

たニコールとは異なり、その要素は明確ではないが色々なものが混ざっている感じを持つためである。中国系も3世、4世にもなると、常にカリブ海の強烈な日差しを受け続けているためか、肌の色は濃くなっていくものである。よって2代また3代前の祖先が「人種的に」何であるかは不明であるが、身体的特徴が純血のヨーロッパ系白人でないミランダの「ちょっと黒すぎる」肌の色について、アフリカ系との混血でないことを即座に否定するマイケルが、人種について偏見・差別がないと繰り返し発言するのは、いささか不思議な感じがした。

また母親や姉に、非ヨーロッパ系の友人がいたからといって、彼女たちが人種差別をしないとは限らないし、家族としてマイケルの結婚相手に最適だと思う特別な人種がいるかもしれない。ヨーロッパ系白人の常套句である、非ヨーロッパ系の「知人がいる」や「友達になれる」、また「友人がいた」は、自身や、自身の環境が人種差別をするものではないことを強調するとき用いられる言い回しである。執筆者の先行研究では<sup>[107]</sup>、「誰とでも仲良くなれる」と強調した、ある若い20代前半のフランス系トリニダード人の女性が、一緒にいて居心地が良く快適なままいられる相手[comfort zone]はヨーロッパ系白人であり、自身の結婚相手として完全に黒い人には魅力を感じないとも発言していた。よってマイケルの家族は、マイケルに直接はミランダの属性について疑問や不満を表明したことはないかもしれないが、表明しないことが疑問や不満を持っていないことであるとは限らない。

とはいえ、トリニダードのフランス系名家として有名な苗字を持つマイケルの両親は、マイケルがヨーロッパ系白人でない女性と結婚しても構わないと常々伝えていたようである。マイケルは父親の苗字を継いでおり、自身をフランス系であると発言したが、マイケルの母親はアイルランド系の家系出身である。よってマイケルは完全なるフランス系ではないのだが、苗字を継いだフランス系により強い愛着と帰属意識があるという。マイケルには二人の娘がいる。マイケルとしては、娘が将来、どんな人種の男と結婚したいと言っても、その人物が娘を大切にしてくれて釣り合う家庭出身であれば歓迎だが、フランス系であることの誇りは忘れないで欲しいと発言した。マイケルにと

って、異人種間結婚は止められない時代になっているという。そのため、マイケルは、娘の選んだ相手との結婚を禁止したところで、おとなしく娘が諦めるわけがなく、『お父さん、さようなら！[Bye, daddy!』と言われて、娘と一生会えなくなってしまうかもしれない危険は冒したくない』と笑いながら発言していた。

#### (5) マーサ 女性 70代後半

次のマーサは、聞き取り調査をした中で最高齢の女性である。現在住む高齢者用住宅には多くのヨーロッパ系白人が住む。マーサは、執筆者がマーサを訪問するのを近所の住人に見られたくないと明言したため、夜間、それもマーサの日常の就寝時間を過ぎた午後9時30分に訪問した。トリニダードのヨーロッパ系白人コミュニティは小さく狭い。特に夫を亡くし独り身で余暇も経済的余裕もある高齢のヨーロッパ系白人女性たちの間では、誰がどこで何をしたか、またどこの誰が誰と何について喧嘩したか、どこの誰がいつ亡くなり遺産相続の動向はどうなったか等、詳細に情報が回る。そのようなコミュニティで生活してきたマーサを、いわゆる現地における「チャイニー [Chinee]」（東洋系の総称）の身体的特徴が当てはまる執筆者が、現地調査中であることがわかるような格好で訪問すると、マーサが何かしらの調査に参加していることが広く知られるようになる。また何についての調査かという情報も、想像を絶する速さで彼らのコミュニティに到達し回る。したがって、現在のマーサの人間関係を含めた穏やかで静かな住環境を守るため、執筆者は「日用品をデリバリーに来た『チャイニー』」に扮して、調査機材を入れたスーパーのビニール袋を両手に持ち、マーサの自宅を訪問した。また「チャイニー」が一人でマーサを訪問している姿は強盗に疑われる可能性もあったので、マーサを執筆者に紹介してくれたマーサの50代の娘を同伴した。

ここまで徹底した偽装のもとに聞き取りに向かったのは、執筆者にとって初めての経験であった。執筆者は、マーサから執筆者の訪問を人に知られたくないと伝えられた際には、マーサは聞き取りされるのを好まないのだと勘ぐったが、決してそうではなかった。マーサはマーサなりに、ヨーロッパ系白人の未亡人が多く住む高齢者用住宅で感じるが多々あり、それをヨーロッパ系白人で

もない、トリニダード人でもない、完全な部外者である執筆者に伝えたかったことがわかった。

「私たちはイギリス系です。私の祖父はプランテーションを所有していました。ヨーロッパ系白人とは何かって？それは、あなた、決まっているじゃない。祖先がヨーロッパから来たとわかっている人。混血していない人。中国系ともインド系とも。フランス系、ベネズエラ系、シリア・レバノン系はいいわ。ポルトガル系も、まあOKね。私たちは混血してないわよ。」

We are English. What people call English Creole, you know. My grandfather owned a plantation in South. What is white? Well, you know, like us, we know our ancestors came from Europe. Not mixed. Not mixed with Chinese or Indian. French, Venezuelan, Syrian/Lebanese are good. Well, Portuguese...ok. We are unmixed!

マーサもイギリス系であることを明かすと同時に、プランテーションを所有する家系、つまり労働者階層ではない家系であることを明らかにした。そして混血の可能性を一蹴した。さらに上記の語りからわかるのは、マーサにとって、肌がヨーロッパ系白人のように白ければ、ヨーロッパ系白人の仲間入りができるということである。色の白い中国系の肌は「黄色がかっている[it's too milky]』』と言い、中国系はどんなに肌の色が白くてもヨーロッパ系白人の仲間入りはできないようである。インド系は、「色の白い若いインド系の女性はきれいだけれど、やっぱりだめ [fair skin young Indian girls are pretty, but they are “no no” to me]』』と発言した。

その一方で、中東出身アラブ系のシリア・レバノン系との混血は、フランス系と並ぶほど快諾が可能なのである。これは彼らのヨーロッパ系白人に近い身体的特徴に加えて、トリニダードとも言われる経済力と、イスラム教徒でもヒンドゥー教徒でもないキリスト教徒（多くはカトリック）であるということも関係しているのかもしれない。しかし、ポルトガル系になると、マーサに一瞬の迷いが生じた。この迷いは、ポルトガル系のトリニダードにおける歴史として、貧しい農業移民が多かったこと、プランテーション労働者であったこと、ラム酒などの小売業であったこと、そして浅黒い肌を持つことに起因しているのであろう。

カトリック教徒が大多数を占めるが、特に強い経済力を持つわけでもなく、やや浅黒い肌を持つトリニダードのポルトガル系は、伝統的に二次的なヨーロッパ系白人として見られることが多い。そのためであろうか、ポルトガル系との混血については、他ヨーロッパ系白人との混血が「Good」であるのに対し、ただの「OK」であった。

一方、決してヨーロッパ大陸にはない南米ベネズエラ出身者がフランス系の次に発話された。ここでのベネズエラ系というのは、トリニダードにおいて「スパニッシュ」と呼ばれるカテゴリーの、スペイン系でもヨーロッパ系でもないが、ヨーロッパ系白人として認識される南欧系の身体的特徴を持つ人々のことであろう。つまり黒い髪、黒い目とややオリーブ色がかった白い肌である。話の流れで、アフリカ系との混血についての考えを聞こうとしたところ、質問を言い終わる前に、「ダメ。ありえない。問題外。絶対にありえない。[No no. No way. Out of question. Absolutely not.]」と遮断された。マーサの語りの中で、アフリカ系が出てこなかったのは、言及を忘れていたのではなく、故意であった。

午後 9 時半に始まったマーサへの聞き取りは 2 時間以上に及んだ。ただでさえ、マーサの就寝時間を過ぎてから聞き取りを始めたのに、午後 11 時を過ぎてもマーサの伝えたいという気持ちの弱まりや疲れは見られず、ますます情熱的に興味深い内容の語りを共有してくれた。

「ここに住んでいるヨーロッパ系白人の婦人たちの中には、耳を疑うような人種差別的発言をする人もいるのよ。言葉では十分じゃないこともある。正直にいうと、私はそういう環境で育ってきたから、黒人は劣っていると思ってしまうの。植えつけられているの。そうやって生きてきたから。それが真実かどうかはどうでもいいの。でも私は、白人でなくても、彼らも同じ人間だと思うの。でも一部の人は、メイドを動物以下のように扱うの。あきらかに犬以下ね。犬の方がかわいがられているわ。犬を叩いたりしないでしょう。そして自分たちは優遇されて当然だと思っている人もいる。例えば、この集合住宅の駐車場に自分がどこに駐車するかが大問題なわけ。混血の人や黒人が、自分たちよりエレベーターに近い駐車スペースに駐車したら怒るわけ。私たちがエレベーターの近くに駐車する権利があるとか言って。まだ普通に歩ける人よ。ここには車椅子の人とか、脳溢血を経験した人とかが住んでいるの。太っちゃ

ったわと言って、ジムに行って、トレッドミルの上で、なめくじの様に、のろのろとウォーキングするくらいなら、エレベーターから一番遠いところに駐車して歩けばいいじゃない！馬鹿げた話よ！」

Some of the white ladies here say things like unbelievably racist comments. Sometimes saying is not enough for them... Honestly, I was living in a certain environment, and I know that makes me think black people are inferior. It is planted. That is our way of living. It does not matter if it is true or not. It really does not matter...and I think even if they are not white, they are humans too. Again, some of them treat their maids like less than animals...apparently, less than dogs. They spoil dogs, but they do not beat up their dogs, right?... And they think they should be treated better. Like, for them, parking spots in this compound's parking lot is a huge issue. Non-white people and black people cannot park closer to the elevator. It bothers them. It does not bother me. But it does to them. Stupid! They are the ones who have rights to park closest to the elevator. What about older people? What about disabled people? They can walk, you know. There are wheeled people. People experienced stroke. They say they are getting on weight, they go to gym, and walk like a snail on a treadmill!! You go park farthest and walk!!! Nonsense!

21 世紀現在、メイドという言葉も差別的であり、政治的に不適切な言葉としての認識が広まっており、昔ながらのメイドの仕事に就いている者は「ヘルパー」と呼ばれるようになってきた。しかし、ここではマーサの語りのまま、メイドという言葉を用いる。

マーサは、自身が「黒人は劣っている [black people are inferior]」とってしまう原因は、「そういう環境 [a certain environment]」で育ってきたからだと述べ、実際にアフリカ系の人々が自分たちヨーロッパ系白人より劣っているか否かという真偽については、「どうでもいい [It does not matter]」ことであると発言した。まず、「そういう環境」とは、「アフリカ系の人々は劣っている。したがってアフリカ系でない自分たちの方が優れている」と

いう理論がまかり通っていた環境である。自らが育ってきた環境では、アフリカ系の人々は農園での肉体労働や商店での荷物運搬などの単純労働に就いていて、常に貧しく、ヨーロッパ系白人に使われる役割であったという。そのことはマーサにとって、「今の無秩序な社会と違って、とても秩序立っていて平和だった。[unlike the chaotic society we have now, it was so ordered in peace.]」だったそうだ。

マーサは独立前のイギリス植民地時代のトリニダードを知る人物である。ごくたまにスーツを着ているアフリカ系の人物を見かけたことはあるが、記憶の中のほとんどのアフリカ系の人々はヨーロッパ系白人に雇われていたという。現在は非ヨーロッパ系の人々もヨーロッパ系白人と同じように教育の機会があり、植民地時代にはヨーロッパ系白人が占めていた専門職にも非ヨーロッパ系の人々が就いている。マーサにとって、病院に行けばアフリカ系や中国系の医者もいる状況や、裁判所に行けばインド系やアフリカ系の弁護士がいるという状況は、自らの社会的・経済的領域を侵略されているように感じ、「無秩序」に見えるのであろう。さらに、植民地時代には圧倒的な経済力を持っていたヨーロッパ系白人を凌ぐ経済力を持つ非ヨーロッパ系の人々も現れていることに、非ヨーロッパ系の人々の労働力を酷使したプランテーション経営で富を築いた自分たちヨーロッパ系白人の特権を侵害されているように感じるのかもしれない。

マーサは、ヨーロッパ系白人婦人たちが問題視する、誰がエレベーターに近い駐車場を取るかということ、また自らは、車椅子に乗る住民や、体が不自由で十分に歩けない住民を差し置いてもエレベーターに近い駐車場を使う権利があるということ、「馬鹿げた[Nonsense]」発想だと言っている。おそらくそのヨーロッパ系白人婦人たちは、子どもの頃からすべてにおいて優遇される特権を享受して生活してきたのだろう。植民地支配が独立という終焉を迎え、非ヨーロッパ系の人々が経済力をつけ、また彼女たちが幼少の頃よりもヨーロッパ系白人の人口が激減している状況では、高齢者用集合住宅の人種的分離は不可能である。絶対的少数であるヨーロッパ系白人は、絶対的多数である非ヨーロッパ系の空間に、少なくとも集合住宅という限られたスペースの中では、平等な立場

として存在していかないといけない。そもそも、非ヨーロッパ系白人と共に平等な立場の集合住宅住人として暮らさなければいけないことが、特権に慣れたヨーロッパ系白人の老婦人たちは不服なのかもしれない。その不満の捌け口として暴力が用いられることもあるだろう。

マーサが就寝時間を過ぎた時間にまで執筆者に会い、伝えたかったのは、マーサ自身は「黒人は劣っていると思ってしまう」と認めながらも、それを言葉のみならず行動で表現する近所のヨーロッパ系白人の婦人たちの非人道的な人種差別的行為であった。マーサは、その言葉だけでは事足りない人種差別的行為には「犬は叩かないけれど、メイドは叩く」ことが含まれることを明言した。

執筆者は、白熱してサイドテーブルをバンバン叩きながら身を乗り出して話し続けるマーサへ、叩かれたメイドは叩かれたままなのか、やり返さないのか、そのメイド職を辞めないのか、雇用主を訴えないのかと聞いてみた。

「一部の人はまだ植民地時代のメンタリティを持ち続けている。亡霊みたいに。メイドにはどんな仕打ちをしてもいいと考えているし。反対に、メイド側も雇用主が絶対的なマスターであり、それがすべて。口答えは許されないと思っているのよ。でも、訴える？誰に？ヨーロッパ系白人コミュニティの力を知っていたら、無駄に時間とお金は費やさないわよ。政界にも司法にも私たちはまだ強い力を持っているから。有力者とも関係があるし。何がなんでも、負けないわよ。」

Some people still have colonial mentality. They are like ghosts. They think maids should accept anything and they can do anything to maids. On the other hand, many of them still think their employer is the absolute master and all that. They believe they cannot talk back, you know. But you said, sue? To who? To what? About what? If you are well aware of what we can do in this society, you don't want to spend time and money, because that won't bring anything. We are still strong in political fields as well as judiciary, you know. We know people... We will not lose no matter what.

コンテキストから判断する限り、語りの中の「メイド」は非ヨーロッパ系白人であることは想像が

ついたが、念のため確認してみたところ、「ヨーロッパ系白人の女の子はメイドにはならないわ。[White girls do not become maids. Just don't.]」とのことだった。ではインド系や中国系のメイドを雇ったことはあるかと聞くと、思いがけない質問だったようで、しばし考えていた。そして、今までに自分でも、自分が子どもの頃の家庭でも、周りを見渡しても、住み込みのメイドはアフリカ系が多かったと発言した。またアフリカ系のメイドに慣れているから、アフリカ系以外のメイドの可能性について考えたこともなかったと発言した。執筆者がトリニダードに居住していた約3年半の間に雇用したことがあるヘルパーの内訳は、アフリカ系が一人、インド系が四人であった。これは執筆者の周りの在留日本人と大差なく、多くの日本人がインド系のヘルパーを雇用していた。他方、在留アメリカ人の家庭ではアフリカ系が多く雇用されていたようである。在留イギリス人はインド系が多く雇用され、在留フランス人はアフリカ系のヘルパーを雇うことが多かったように記憶する。自分のプライベートな空間に招き入れ、自分の身の回りのことをしてもらうことに不安や不快感を抱かない特定の「人種」があるのかどうかは本稿の考察の対象外ではあるが、興味深い違いであると感じた。このように、マーサの「メイドはアフリカ系であるもの」という価値観も、マーサの幼少時代からの経験を元に構成されていった。

ここでマーサは、暴力を振るうことに罪の意識を感じないメイド雇用主と、暴力を振るわれるままに受け止めるメイドの関係を「植民地時代のメンタリティ[colonial mentality]」として表現した。この場合の、メイド雇用主は70代のヨーロッパ系白人女性であるが、彼女が暴力を振るう相手であるメイドは20代のアフリカ系女性である。植民地時代の名残の中で育ってきた70代女性が、植民地時代の支配者側のメンタリティを継承してきたのは、まだ理解ができる。しかし、教育の機会もあり、自由を謳歌できるはずの20代の若いアフリカ系女性が、叩かれながら家事労働に従事していることは信じがたかった。マーサによると、首都のファストフード店で店員をするよりも高額な賃金が支払われていること、またヨーロッパ系白人の家で働いているということは、身上が明らかで信頼できるとみなされていることを意味するため、特に不人気な職業ではないことは確かだとのことであ

る。

さらなる暴力行為について聞いてみると、マーサは、同じ集合住宅内に住むヨーロッパ系白人女性が、18世紀から家族に伝わる銀の杖でメイドを殴ったり、つついたりしていたのを見たことがあると述べた。その銀の杖は、その女性の父母、また祖父もそれぞれの時代に雇用していたメイドに「お仕置き [discipline]」するたびに使っていたそうである。「ね？まだ一部のヨーロッパ系白人は植民地時代を生きているのよ。[See? Some of us are living the colonial history.]」と憤慨しながら発言した。

公式には現在トリニダードの人口の0.7%しか存在しないとされるヨーロッパ系白人であるが、マーサは、21世紀現在におけるヨーロッパ系白人の政界や司法への影響力の大きさを示唆した。「まだ(still)」ということ、植民地時代にヨーロッパ系白人が持っていた影響力をそのまま持ち続けているということを表示したのであろう。どんなに優秀な弁護士を立てて、ヨーロッパ系白人を訴えようとも、司法の場では平等に裁けないということを暗示している。これが、現在も絶対的少数で最強のヨーロッパ系白人と言われる所以の一例であろう。

バルバドスでの聞き取り調査に続いてトリニダードで行った聞き取り調査の対象者は、バルバドスと同様に、トリニダードにおいてヨーロッパ系白人としてのアイデンティティを持ち、ヨーロッパ系白人としてトリニダードで暮らす者だけであった。しかしバルバドスの対象者と異なったのは、トリニダードでの対象者は、全員が混血の可能性を完全に否定し、純血のヨーロッパ系白人であると主張したことである。そして自らは純血のヨーロッパ系白人であると強調すると同時に、混血の恋愛相手がいたり、非ヨーロッパ系の人々とも友達になれるなどと発言したりし、徹底した人種差別主義者ではないと示唆する者が多かった。

他方で、自身が混血の子どもを作ること、つまり自分の家族の家系にヨーロッパ系白人以外の血が入ることに関しては、徹底した拒否反応が見られた。限りなく純血のヨーロッパ系白人に近い身体的特徴の妻を持つ聞き取り対象者もいたが、多くの既婚の聞き取り対象者のそれぞれの配偶者は、写真で見る限り、少なくとも身体的特徴はヨーロッパ系白人そのものであった。また親族にヨ

ヨーロッパ系白人でない血が入ってくることにしても、好ましく思わない反応を得た。

トリニダードにおいては、聞き取り調査で得られた語りをそのまま鵜呑みにすれば、混血しているヨーロッパ系白人はいないことになる。歴史的に、完全な純血のヨーロッパ系白人の筋筋を保つのは非常に難しく、ほぼ不可能であるといえる。それが明らかなのに、なぜそこまでトリニダードの対象者は自らのヨーロッパ系白人としての純血性を主張するのか。今回の聞き取り調査でお会いした対象者は、全員が本当に純血のヨーロッパ系白人なのかもしれない。執筆者には、その科学的な事実はわからない。それは対象者が遺伝子検査を受けない限り、彼らの「ヨーロッパ系白人」が何で構成されているかは明らかにならない。しかし遺伝子検査を自ら希望するトリニダードのヨーロッパ系白人は、あまり存在しないであろう。なぜなら、トリニダードのヨーロッパ系白人は、遺伝子検査によって自身の人種背景の科学的事実を知るよりも、社会的事実である彼らのヨーロッパ系白人としての純血を、徹底して維持したいと願うからである。

## 6. まとめと今後の課題

これまで検討してきたように、本稿は、旧英領カリブ海地域のうち、バルバドスとトリニダードと呼ばれる二つの島におけるヨーロッパ系白人のアイデンティティである白人性の多様性に着目し、その違いや特徴を探った。17～18世紀より本格的にヨーロッパ列強に植民地化され、世界各地からの労働者を受け入れてきたバルバドスとトリニダードには、ヨーロッパ系白人と共に、アフリカ系やインド系、中国系やシリア・レバノン系といった世界各地出身の多人種・多民族が紛争などを一切起こさずに、お互いの文化を尊重しながら共生している社会が存在する。

世界的にも稀な、その平和な多文化共生社会の中で、ヨーロッパ系白人は絶対的少数の立場であり、総人口に対し、バルバドスが2.7%、トリニダードが0.7%しか存在しない。しかし人口こそ少ないが、彼らは植民地時代より圧倒的な経済的・政治的・文化的な影響力を持ちつづけ、21世紀の現代社会においても社会的強者としての立場にいる者が多い。この彼らが、イギリスからの独立以降、その権力で他者を虐げ、支配しようとしてこなかっ

た姿勢こそが、現在の多文化共生社会を可能にしてきたのである。この鍵を握るはずのヨーロッパ系白人に関する研究の蓄積は、バルバドスとトリニダードはもとより、カリブ海地域全体でもまだ浅い。そのため本稿は、バルバドスとトリニダードのヨーロッパ系白人が、非ヨーロッパ系白人とどのような社会階層・階級を築き、その中でどのような軋轢を経験して、白人としてのアイデンティティである白人性をどのように構築してきたのかを明らかにする先駆的な研究の一端をまとめた。つまり、今まで記録されてこなかった、絶対的少数でありながら植民地時代から様々な影響力を持ち続ける社会的強者であるヨーロッパ系白人の白人性が、バルバドスとトリニダードの間でどのように違うのかを示した。

本稿は、2016年8月と2017年2月にバルバドスとトリニダードにおいて、オーラル・ヒストリーの理論で入手した、ヨーロッパ系白人の貴重な個人の経験の語りを質的データとして提示し考察を行った。これは白人性に関する研究、特にカリブ海の白人性に関する研究は未だ少なく、科学的かつ数量的に分析を行う量的研究が難しいからである。そのため個人の経験を「史実」の一つとして認め、個人の主張や誇張、思い込みなども含んだ語りを、社会を構成する「事実」の一つとして扱い、その「事実」を考察することで、その経験をした個人が構成する社会の構造や、その社会での一般の人々の暮らしの営みについて理解を進めることができると考えた。

調査対象者としてのヨーロッパ系白人の選択は、バルバドスにおいては現地研究協力者に一任し、トリニダードにおいては執筆者が既に持っていた人的ネットワークを駆使した。調査対象者は、成人で、最低3世代にわたりカリブ海地域に暮らしている者で、自身をヨーロッパ系白人と認識し、ヨーロッパ系白人社会でもヨーロッパ系白人と認識されている者とした。聞き取り調査は、選択された調査対象者のうち、本研究と聞き取り調査の目的や方法などの詳細やプライバシー保護に関し説明を受け承諾した者のみに対して行われた。聞き取りは、約1時間を目安に計画された半構造化インタビューで、調査対象者が希望した場所で行われ、ICレコーダで録音された。その録音は文字起こしされた後、読みやすいように、また語り手の意図を壊さないようにヨーロッパ系白人の貴重

な個人の経験の一次資料として再構築された。

バルバドスとトリニダードにおいて入手した語りからは、その二つの島における白人性の明らかな違いが提示された。バルバドスにおいては、混血でも身体的特徴がヨーロッパ系白人であれば、ヨーロッパ系白人として認識されることがわかった。それは時に、混血であるけれどもヨーロッパ系白人であるということで、引用符付きの『白人』とされる。そして、すべての調査対象者は身体的特徴がヨーロッパ系白人そのものであったが、執筆者に対して、自身が混血である事実を隠さない者が多かった。また自身を純血のヨーロッパ系白人と説明しながらも、混血の可能性を示唆した者もいた。そのため、バルバドスでは混血であるという事実よりも、ヨーロッパ系白人としての身体的特徴こそが現在の社会においてヨーロッパ系白人として認識される要素であることは明らかである。そして多くの調査対象者にとって、自身の家系をヨーロッパ系白人のものとして保つことにも、特別な思い入れがあるわけではなかった。同時に、混血することに対して強い反対を表明する調査対象者も多くなかった。そのためか調査対象者の配偶者は、必ずしもヨーロッパ系白人であるというわけではなかった。

他方、トリニダードの調査対象者は、混血という言葉自体にも嫌悪を示すほど、ヨーロッパ系白人として純血であることを重要視していた。つまり、ヨーロッパ系白人としての純血性が、トリニダードにおいてはヨーロッパ系白人として認識されるために欠かせない要素であるようだ。よってトリニダードのヨーロッパ系白人にとって、混血はタブーである。トリニダードの、またカリブ海地域の歴史を考えると、完全に純血のヨーロッパ系白人の家系を保つのは非常に難しく、不可能に近いのであるが、それでも白人としての純血性を守ってきたと主張する。このことから、トリニダードにおいてどれほど純血性が重要視されてきたかが理解できる。その一方で、グローバル化が進んだ現代社会では、混血が進むことは自然であることを理解していると発言した者もいた。

また、トリニダードにおけるヨーロッパ系白人社会の階層について言及したのはフランス系であった。植民地時代のヨーロッパ系白人の職業に応じた階層が、現代社会に生きる子孫にまで受継がれているという主張であった。イギリス系も混ざ

っているもののフランス系だと自己認識する対象者は、カリブ海の小さな島の、小さなヨーロッパ系白人社会の階層の頂点を独占するのはフランス系であると信じており、イギリス系とは一線を引いて欲しいと発言した。その理由は、植民地時代にはフランス系はプランテーション領主として広大な領地を所有してきたが、イギリス系は商人や植民地政府の役人であったことから、地主階層の子孫であるフランス系の自身たちはイギリス系より階層が上であるからとの主張であった。そして、父祖が何世代にわたりトリニダードで生活しているか、つまりトリニダードに長く暮らしている家系であればあるほど、「ヨーロッパ系白人」の階層上部に属することができるようだ。

そしてトリニダードの年配の調査対象者は、非ヨーロッパ系の人々に対する優位性を信じていると何のためらいもなく表現した。この植民地時代の白人優越主義を持ち続けていることを否定しない姿勢は、植民地時代に生きたかどうか、また植民地時代の価値観の影響をどれだけ受けているか、つまり調査対象者の年齢によって差異が見られることがわかった。

このように本稿ではバルバドスとトリニダードにおけるヨーロッパ系白人の白人性の違いを明らかにした。執筆者は、カリブ海の二つの島のヨーロッパ系白人の興味深い事実を提示することで、カリブ海地域の白人性研究に一步を踏み出したと考える。とはいえ、この限られた本稿の紙面では、その白人性がどのように構築されてきたのか、どのような社会の要素が白人性に影響を与えてきたのか、などの問題について、多角的で包括的な白人性に関する議論を深く行うことは明らかにできていない。ヨーロッパ系白人が非ヨーロッパ系白人と、どのような交流を持ち、その経験が彼らのアイデンティティである白人性の構築にどのような影響を与えてきたのかについては後続研究としてまとめたい。今後の課題として、バルバドスやトリニダードをはじめとするカリブ海地域の歴史や社会における多角的な理解を進めるため、過小評価されてきたバルバドスとトリニダードのみならず、広くカリブ海地域の他の島々におけるヨーロッパ系白人が置かれた多様な背景の記録を引き続き行っていきたい。

## 謝辞

貴重な語りを提供して下さったバルバドスとトリニダードのヨーロッパ系白人の皆様にご心よりお礼を申し上げます。また快適かつ効率的に現地調査を行うことができた Aegis Ltd. と Island Buddy Ltd. の皆様からの有難いご支援に感謝いたします。そしていつも温かく迎えて下さるバルバドスとトリニダードの在留邦人の皆様、心身ともに支えて下さってありがとうございました。

My sincere and deepest gratitude goes to the European-white people of Barbados and Trinidad. Without your inspiration and valuable information, this study would not be possible. I would like to express special appreciation to Ms. J. Innis, Ms. A. Israel, Ms. T. Carr, Ms. K. Black, Ms. A. Reason, and Mr. W. Cezair.

## 付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所戦略的個人研究費（課題番号:S2811）の助成を受けたものである。

## 参考文献

- [1] Ito, Michiru. "Constructing and Reproducing Whiteness: An oral history of French Creoles in Trinidad". *International Journal of Human Culture Studies*. 2016, pp.613-645.
- [2] Ito, M. "French Creoles in Trinidad: Constructing and Reproducing Whiteness". Masters Dissertation. University of Warwick, UK. 2006.
- [3] Barbados Statistical Service. "2010 Population and Housing Census".  
[http://www.barstats.gov.bb/files/documents/PHC\\_2010\\_Census\\_Volume\\_1.pdf](http://www.barstats.gov.bb/files/documents/PHC_2010_Census_Volume_1.pdf), (accessed 2018-6-2).
- [4] Central Statistical Office. The republic of Trinidad and Tobago. "2011 Population and Housing Census."
- [5] Ito, Michiru. "The Caribbean Community Single Market and Economy". *International Journal of Human Culture Studies*. 2016, pp.63-97.
- [6] 前掲[1] Ito. 参照.
- [7] Williams, Eric. *History of the People of Trinidad and Tobago*. A&B Publishers, 1942.
- [8] 伊藤みちる. 「第 27 章 環カリブ海地域のヨーロッパ系白人 - 絶対少数派としての存在とアイデンティティ」国本伊代編『カリブ海世界を知るための 70 章』明石書店, 2017, pp.130-133.
- [9] Poyer, John. *The History of Barbados: From the First Discovery of the Island, in the Year 1605, Till the Accession of Lord Seaforth, 1801*. Forgotten Books, 2017.
- [10] カリブ海地域の現代の白人性について言及している研究の例は以下のとおり。  
Lopez, Alfred. *Postcolonial Whiteness: A Critical Reader On Race And Empire*. State University of New York Press, 2005.  
Tate, Shirley et al. "Whiteness and the Contemporary Caribbean". *Caribbean Racisms. Mapping Global Racisms*. Palgrave Macmillan, 2015, pp.88-124.
- [11] Bridget Brereton et al. (eds.). *General History of the Caribbean: Volume V: The Caribbean in the Twentieth Century*. UNESCO Publishing/Macmillan, 2003.
- [12] Lowenthal, David. "Black Power in the Caribbean Context". *Economic Geography*. 1972, 48(1), pp. 116-134.
- [13] Quinn, Kate. *Black Power in the Caribbean*. University Press of Florida, 2014.
- [14] 伊藤みちる. 「第 26 章 環カリブ海地域のシリア・レバノン系社会 - 行商人から大富豪へ」国本伊代編『カリブ海世界を知るための 70 章』明石書店, 2017 年, pp. 126 - 129.
- [15] トルデシリヤス条約 (1494 年)
- [16] Engerman, L. Stanley et al. "The Demographic Structure of the Caribbean Slave Societies in the Eighteenth and Nineteenth Centuries". Franklin W. Knight. (ed.). *General History of the Caribbean. Vol. 3, The slave societies of the Caribbean*. UNESCO Publishing, 1997, pp. 45-104.
- [17] Brereton, Bridget. *An Introduction to the History of Trinidad and Tobago*. Heinemann International Literature and Textbooks, 1996.
- [18] Jerry, Sampson. *History of St. Lucia, Caribbean Island, History of an Era: People, Economy, Government, Travel*. Createspace Independent Publishing, 2016.
- [19] Schomburg, Robert. *History of Barbados*. Routledge, 2015.
- [20] 国本伊代 「第 8 章 カリブ海域の先住民は絶滅したのか? - 病死・虐待・逃亡・絶滅・復活」国本伊代編『カリブ海世界を知るための 70 章』明石書店, 2017 年, pp. 46-49.
- [21] 伊藤みちる 「第 11 章 ヨーロッパからの労働移民 - プアー・ホワイトの導入」国本伊代編『カリブ海世界を知るための 70 章』明石書店, 2017 年, 58-61.
- [22] O'Callaghan, Sean. *To Hell or Barbados*. The O'Brien Press, 2013.
- [23] Jones, Cecily. *Engendering whiteness- White women and colonialism in Barbados and North*

- Carolina, 1627-1865. Manchester University Press, 2007.
- [24] The Trans-Atlantic Slave Trade Database より .  
<http://www.slavevoyages.org/>, (accessed 2018-5-6).
- [25] La Guerre, John (ed.). *Calcutta to Caroni- The East Indians of Trinidad*. Extra Mural Studies Unit, 1985.
- Emmer, PC. Translated by Emery, Chris. *The Dutch Slave Trade, 1500-1850*. Berghahn Books, 2005.
- [26] Lai, L. Walton. *The Chinese in the West Indies: 1806-1995 A Documentary History*. The University of West Indies Press, 1998.
- Bryan, Patrick. "The Settlement of the Chinese in Jamaica: 1854: c.1970". *Caribbean Quarterly*. 2004, 50, pp. 15-25.
- Hemlock, Doreen. "Out Of Many, One People: Chinese-Jamaicans Treasure Their Roots And Their Communities". *Sun-Sentinel*. April 17, 2005. [http://articles.sun-sentinel.com/2005-04-17/features/0504140989\\_1\\_jamaican-chinese-new-year-chinese-heritage](http://articles.sun-sentinel.com/2005-04-17/features/0504140989_1_jamaican-chinese-new-year-chinese-heritage), (accessed 2018-3-06).
- [27] Allen, Pamela. "Javanese cultural traditions in Suriname". *RIMA: Review of Indonesian and Malaysian Affairs*. 2011, 45(1/2), pp.199-223. <https://search.informit.com.au/documentSummary;dn=422808993024826;res=IELAPA> (accessed 2018-6-1).
- [28] Floud, Roderick et al. *Cambridge Economic History of Modern Britain, Vol.1: Industrialisation, 1700-1860*. Cambridge University Press, 2004.
- [29] Beckles, McD. Hilary. "White Women and a West India Fortune: Gender and Wealth during Slavery". Howard Johnson et al. (eds.) *The White Minority in the Caribbean*. Markus Wiener Publishers, 1998, pp.1-16.
- [30] Brereton, Bridget. *A History of Modern Trinidad 1783-1962*. Terra Verde Resource Center, 2009.
- [31] Austin-Broos, Diane. "Jamaica's Discourse of Heritable Identity". Christine Barrow et al. (eds.) *Caribbean Sociology: Introductory Reading*. Ian Randle, 2001, pp.256-286.
- Williams, Brackette. "Ideology and the Formation of Anglo-European Hegemony". Christine Barrow et al. (eds.) *Caribbean Sociology: Introductory Reading*. Ian Randle, 2001, pp. 270-285.
- [32] Ryan, Selwyn. *Eric Williams: The Myth and the Man*. University of the West Indies Press, 2009.
- [33] Quinn, Kate, ed. *Black Power in the Caribbean*. Gainesville: University of Florida Press, 2013.
- Pasley, Victoria. "The Black Power Movement in Trinidad: An Exploration of Gender and Cultural Changes and the Development of a Feminist Consciousness". *Journal of International Women's Studies*, 3(1), 2001, pp. 24-40. <http://vc.bridgew.edu/jiws/vol3/iss1/2>, (accessed 2018-5-23).
- [34] Alleyne, C. Mervyn. *The Construction and Representation of Race and Ethnicity in the Caribbean and the World*. University of the West Indies Press, 2005.
- [35] Organization of American States. Inter-American Commission of Human Rights. "The Situation of the People of African Descent in the Americas". 2011. [https://www.oas.org/en/iachr/afro-descendants/docs/pdf/afros\\_2011\\_eng.pdf](https://www.oas.org/en/iachr/afro-descendants/docs/pdf/afros_2011_eng.pdf), (2017-11-3).
- [36] Jones, Cecily. "Contesting the boundaries of gender, race and sexuality in Barbadian plantation society". *Womens History Review* 12 (2), 2003, pp. 195-232.
- [37] Shibata, Yoshiko. "Searching for a Niche, Creolizing Religious Tradition: Negotiation and Reconstruction of Ethnicity among Chinese in Jamaica". Pratap P Kumar. *Religious Pluralism in the Diaspora*. Brill, 2006, pp. 51-72.
- "Revisiting Chinese Hybridity: Negotiating Categories and Re-constructing Ethnicity in Contemporary Jamaica- a Preliminary Report". *Caribbean Quarterly*, 2016, 51(1), pp. 53-7.
- [38] 前山隆「クリオール化, ガイアナ化, 中国系ガイアナ文化」『アジア系ラテンアメリカ人の民族性と国民統合 - 民族集団間の協調と相克に関する研究』静岡大学人文学部文化人類学教室, 1993, pp.79-93.
- [39] Cardinez, Gary. "Chinese 200th 'arrival' celebrations: The Chinese community in Trinidad and Tobago will celebrate the 200th anniversary of their arrival to this country on October 12, 2006". Trinidad and Tobago News Day. 6 July, 2006. <http://archives.newsday.co.tt/2006/07/06/chinese-200th-arrival-celebrations/>, (accessed 2018-6-3).
- [40] Wilson, R. Andrew. (ed.). *The Chinese in the Caribbean*. Markus Wiener Publishers, 2004.
- Lai, W. Look "Images of the Chinese in West Indian History". Wannii Anderson et al. (eds.). *Displacements and diasporas: Asians in the Americas*. Rutgers University Press, 2005, pp. 54-77.
- Johnson, Kim. *Descendants of the Dragon: The Chinese in Trinidad 1806-2006*. Ian Randle

- Publishers, 2006.
- Lai, W. Look. "The Chinese of Trinidad and Tobago: Mobility, Modernity and Assimilation During and After Colonialism". Tan C. Beng (ed.). *Chinese Transnational Networks*. Routledge, 2007, pp.191-121.
- [41] 在トリニダードのフランス大使館勤務経験を持つフランス系トリニダード人より.
- [42] "One French Creole's revision of T&T history: Why De Verteuil's Laventille rant is dead wrong". Saturday 29 October 2016. <https://wired868.com/2016/10/29/french-creole-revision-of-tt-history-why-de-verteuils-laventille-rant-is-dead-wrong/comment-page-2/>, (accessed 2018-6-4).
- [43] Beckles, McD Hilary. *A History of Barbados: From Amerindian Settlement to Caribbean Single Market*. Cambridge University Press, 2007, pp. 1-6.
- [44] Shaw, Jenny. *Everyday Life in the Early English Caribbean: Irish, Africans, and the Construction of Difference*. The University of Georgia Press, 2013.
- [45] Sheppard, Jill. *The 'Red-legs' of Barbados*. KTO Press, 1977.
- [46] Ibid.
- [47] Jordan, Don et al. *White Cargo: The Forgotten History of Britain's White Slaves in America*. New York University Press, 2008.
- [48] 前掲[23] Jones. 参照.
- [49] 前掲[43] Beckles. 参照
- [50] Rodgers, Nini. "A Changing Presence: The Irish in the Caribbean in the seventieth and eighteenth centuries". Alison Donnell et al. (eds). *Caribbean Irish Connections: Interdisciplinary Perspectives*. The University of the West Indies Press, 2015, pp. 17-32.
- [51] Dunn, S. Richard. *Sugar and Slaves: The Rise of the Planter Class in the English West Indies, 1624-1713*. Omohundro Institute and University of North Carolina Press, 2000.
- [52] Levy, M. Barbette. "Early Puritanism in the Southern and Island Colonies". *Proceedings of the American Antiquarian Society*. 70(1), 1960, pp. 69-348.
- [53] Beckles, Hilary. "Class Formation in Slave Society: The rise of a black labour elite and the development of a white lumpen-proletariat in seventeenth century Barbados". *Journal of Barbados Museum and Historical Society*. 37(1), 1983, pp. 20- 34.
- [54] Thomas-Hope, M. Elizabeth. *Caribbean Migration*. University of the West Indies Press, 2002.
- [55] 前掲[7] Williams. 参照.
- [56] De Verteuil, Anthony. *Trinidad's French Legacy*. Litho Press, 2010.
- [57] Ibid. P.9.
- [58] Gomes, Sue-Anne (ed.). "The Coloniser of Trinidad". Gerard Besson et al.(eds.). *The Book of Trinidad*, Paria Publishing, 2010, pp.48-64.
- [59] Padron, Francisco. *Spanish Trinidad*. Ian Randle, 2012.
- [60] 1802年3月25日にイギリスとフランスとの間で締結された, フランス革命戦争の講和条約「アミアンの和約」.
- [61] 前掲[7] Williams. 参照.
- [62] Ferreira, S. Jo-Anne. "Trinidad's French Creole Linguistic and Cultural Heritage: Documentation and Revitalization Issues". Béatrice Boufoy-Bastick et al. (eds.). *Caribbean Dynamics: Re-configuring Caribbean Culture*. Ian Randle, 2015, pp.111-125.
- [63] Cudjoe, Selwyn. *Beyond Boundaries: The Intellectual Tradition of Trinidad and Tobago in the Nineteenth Century*. University of Massachusetts Press, 2003.
- [64] Lai, L. Walton. "The Chinese Indenture System in the British West Indies and Its Aftermath". Andrew Wilson (ed.). *The Chinese in the Caribbean*. Markus Wiener, 2004, pp.3-24.
- Ferreira, S. Jo-Anne. "The Portuguese of Trinidad". Besson, Gerard et al. (eds.). *The Book of Trinidad*, Paria Publishing, 2010, pp.326-335.
- [65] Barclay, A. Lou. "The Syrian Lebanese Community in Trinidad & Tobago: A Preliminary Study of a Commercial Ethnic Minority". *Entrepreneurship in the Caribbean: Culture, Structure, Conjecture*. The University of the West Indies Press, 2002.
- [66] 前掲[14] 伊藤. 参照.
- [67] Brereton, Bridget. "The White Elite of Trinidad, 1838-1950". Howard Johnson et al. (eds.). *The White Minority in the Caribbean*. Ian Randle, 1998, pp. 32-70.
- Mc Letchie, Alison. *The Parasitic Oligarchy? The Elites in Trinidad and Tobago*. (Doctoral dissertation). University of South Carolina. 2013, <http://scholarcommons.sc.edu/etd/2738> (accessed 2018-3-2)

- [68] Ryan, Selwyn. *Eric Williams: The Myth and the Man*. University of the West Indies Press, 2008.
- Darity, William. “Eric Williams and Color Stratification in the Caribbean”. Tanya L. Shields (ed.) *The Legacy of Eric Williams: Into the Postcolonial Moment: Into the Postcolonial Moment*. University Press of Mississippi, 2015, pp. 109-125.
- [69] Lamming, George. “The Legacy of Eric Williams”. *Callaloo*. 1997, 20 (4) Eric Williams and the Postcolonial Caribbean: A Special Issue (Autumn, 1997), pp. 731-736.
- エリック・ウィリアムが植民地支配からの解放を呼びかけた演説 “Massa Day Done” (“Master’s Day is Done” 支配者たちに虐げられる日々は終わった) のスクリプトは以下を参照。
- Williams, Eustace Eric. “Massa Day Done (Public Lecture at Woodford Square, 22 March 1961)”. *Callaloo*. 1997, 20 (4), pp. 725-730
- [70] “Inward Hunger: The Story of Eric Williams”. 2011. Director: Mariel Brown. Film. エリック・ウィリアムズと交流のあった人々へのインタビューや様々な歴史的資料の検証を通じて、エリック・ウィリアムズの公私生活や人物像、功績の裏の逸話を描いたドキュメンタリー映画。
- [71] 前掲[1] Ito. 及び, [2] Ito. 参照.
- [72] この数値はトリニダードに住むフランス系トリニダード人が、フランス系トリニダード人の人的ネットワークを用い、フランス系トリニダード人コミュニティに属している人数を、フランス系苗字ごとに整理して 2004 年に算出したものである。よって、同じ苗字を持っていてもフランス系トリニダード人コミュニティに属していないアフリカ系やインド系の人物はカウントされていない。さらに、絶対数が少ないフランス系同士の結婚は減ってきており、2018 年現在は 0.02% よりもさらに少なくなっているであろう。
- [73] Brod M. Thomas. “Alcoholism as a Mental Health Problem of Native Americans: A Review of the Literature”. *Arch Gen Psychiatry*. 1975, 32(11), pp. 1385-1391.
- Halle, Tamara G. et al. “Family influences on school achievement in low-income, African American children”. *Journal of Educational Psychology*. Vol 89(3), 1997, pp. 527-537.
- [74] Brah, Avta. “Women of South Asian Origin in Britain: Issues and Concerns”. *South Asia Research*. 1987, 7(1), pp. 39-54.
- West, Jackie et al. “South Asian women in employment: The impact of migration, ethnic origin and the local economy”. *Journal of Ethnic and Migration Studies*. 2010, 21(3), pp. 357-378.
- [75] Hargreaves, G. Alec. Algerians in France: The end of the line? *Contemporary French Civilization*. 1990, 14 (2), pp. 292-306.
- Gurfinkiel, Michel. “Islam in France: The French Way of Life Is in Danger”. *Middle East Quarterly*. 1997, 4(1), pp. 1-13.
- [76] Bayley, David. *Minorities and the Police; Confrontation in America*. Free Press, 1969.
- Castles Stephen. *Here for good: Western Europe's new ethnic minorities*. Pluto Press, 1984.
- Rubino, Antonia. “Immigrant Minorities: Australia”. Marlis Hellinger et al. (eds.). *Handbook of Language and Communication: Diversity and Change*. Mouton De Gruyter, 2009.
- Bird, Karen. “The Political Representation of Visible Minorities in Electoral Democracies: A Comparison of France, Denmark, and Canada”. *Nationalism and Ethnic Politics*. 2012, 11(4), pp. 425-465.
- [77] Frankenberg, Ruth. *White Women, Race Matters: The Social Construction of Whiteness*. University of Minnesota Press, 1993.
- Dyer, Richard. *Whiteness*. Routledge, 1997.
- 藤川隆男. 「白人性の探求 - 白鯨を追って」藤川隆男編『白人とは何か? - ホワイトネス・スタディーズ入門』刀水書房, 2005 年, pp. 16-26.
- 『人種差別の世界史 - 白人性とは何か』刀水書房, 2011 年.
- [78] Ibid.
- [79] Riggs, Damien. *Taking up the challenge: critical race and whiteness studies in a postcolonising nation*. Crawford House Publishing, 2007.
- Fee, Margery et al. “Whiteness' and ‘Aboriginality’ in Canada and Australia: Conversations and identities”. *Feminist Theory*. 2007, 8(2), pp. 187-208.
- Lopez, Alfred. *Postcolonial Whiteness: A Critical Reader On Race And Empire*. State University of New York Press, 2005.
- Garner, Steve. “The Uses of Whiteness: What Sociologists Working on Europe Can Draw from US Research on Whiteness”. *Sociology*. 2006, 40(2), pp. 257-275.
- Hylton, Kevin et al. “Reading Ronaldo: contingent

- whiteness in the football media”. *Soccer & Society*. 2015, 16(5-6), pp. 765-782.
- Loftsdóttir, Kristín. *Whiteness and Postcolonialism in the Nordic Region: Exceptionalism, Migrant Others and National Identities*. Routledge, 2016.
- Burrows, Victoria. *Whiteness and Trauma: The Mother-Daughter Knot in the Fiction of Jean Rhys; Jamaica Kincaid and Toni Morrison*. Palgrave Macmillan, 2004.
- Twine, France. “White like who? The value of whiteness in British interracial families”. *Ethnicities*. 2010, 10(3), pp. 292-312.
- Ashikari, Mikiko. “Cultivating Japanese Whiteness: The ‘Whitening’ Cosmetics Boom and the Japanese Identity”. *Journal of Material Culture*. 2005, 10(1), pp. 73-91.
- Fujimoto, Etsuko. “Japanese-ness, Whiteness and the “Other” in Japanese Internationalization”. Collier, Mary. (ed.). *Transforming Communication About Culture*, Sage, 2001, pp. 1-24.
- Steyn, Melissa. *Whiteness Just Isn't What It Used to Be: White Identity in a Changing South Africa*. State University of New York Press, 2001.
- Punt, Jeremy. “(Southern) African Postcolonial Biblical Interpretation: A White African Perspective”. *Journal of Early Christian History*. 2017, 7(3), pp. 4-24.
- Casey, Zachary. “Strict fathers, competing culture(s), and racialized poverty: white South African teachers’ conceptions of themselves as racialized actors”. *Race Ethnicity and Education*. 2016, 19(6), pp. 1262-1274.
- [80] Beckles, Hilary, “White Women and Slavery in the Caribbean”. *History Workshop Journal*. 1983, 36, pp.66-82. 及び, 前掲 [29], [43], [53] 参照.
- [81] Jones, Cecily. “Mapping Racial Boundaries: Gender, Race, and Poor Relief in Barbadian Plantation Society”. *Journal of Women's History*. 1998, 10(3), pp. 9-31.
- “A Darker Shade of White: Gender and Social Class in the Reproduction of White Identity in Barbadian Plantation Society”. Heloise Brown et al. (eds.) *White? Women: critical perspectives on race and gender*. Raw Nerve Books, 1999, pp.159-180. 前掲[23] Jones. 参照.
- [82] Shepherd, Verene. *Women of the Caribbean: The British colonized territories*. Ian Randle, 1999. Verene Shepherd. (ed.). *Women in Caribbean History*. Ian Randle, 1999.
- [83] Besson, Gerard. *The Cult of the Will*. Paria Publishing, 2011.
- [84] 前掲[1] Ito. 及び, 前掲[2] Ito.参照.
- [85] ファノン, フランツ. 『黒い皮膚・白い仮面』みすず書房, 1998年.  
前掲[74] 藤川. 参照.
- [86] 前掲[36] Jones. 参照.
- [87] 前掲[74] 藤川. 参照.
- [88] 前掲[74] 藤川. 参照.
- [89] Mullings, Beverley. “Commentary: Post-Colonial Encounters of the Methodological Kind”. *Southeastern Geographer*. 2005, 45(2), pp.274-280.
- Kingsbury, Paul. “Riddims of the Street, Beach, and Bureaucracy: Situating Geographical Research in Jamaica”. *Southeastern Geographer*. 2005, 45, pp. 251-273.
- [90] Charles, Christopher. “Skin Bleaching, Self-Hate, and Black Identity in Jamaica”. *Journal of Black Studies*. 2003, 33(6), pp.711-728.
- Hope, Donna. “From Browning to Cake Soap: Popular Debates on Skin Bleaching in the Jamaican Dancehall”. *Journal of Pan African Studies*. 2011, 4(4), pp.165-195.
- Brennan, Fernne. *Race Rights Reparations: Institutional Racism and The Law*. Routledge, 2017.
- [91] Bush, Barbara. “White ‘ladies’, coloured ‘favourites’ and black ‘wenches’; some considerations on sex, race and class factors in social relations in white Creole Society in the British Caribbean”. *Slavery & Abolition*, 2008, 2(3), pp. 245-262.  
前掲[8] 伊藤. 参照.
- [92] Kelleher, Lawrence. *To shed a tear-A story of Irish slavery in the British West Indies*. Writers Club Press, 2001.
- Nixon, Guy. *Slavery in the West: The Untold Story of the Slavery of Native Americans in the West*. Xlibris, 2011.
- [93] 前掲[1] Ito. 及び, 前掲[68] Ito. 参照.
- [94] Oxford African American Studies Center. “Jamaica: Vital Statistics”. [http://www.oxfordaasc.com/public/samples/sample\\_country.jsp](http://www.oxfordaasc.com/public/samples/sample_country.jsp), (accessed 2018-4-23).
- [95] Bureau of Statistics, Guyana. “2012 Census”. 2016, <http://www.statisticsguyana.gov.gy/download.php?file=93>, (accessed, 2017-8-9).

- [96] United States Census 2010.  
<https://web.archive.org/web/20110706203009/http://2010.census.gov/2010census/data/>, (accessed 2017-3-8).
- [97] La Oficina Nacional de Estadística e Información (ONEI). “Censo de Población y Viviendas 2012”. (キューバ国家統計局. 「2012年キューバ国勢調査結果」) <http://www.one.cu/censo2012.htm>, (accessed 2017-3-5).  
La Oficina Nacional de Estadística e Información (ONEI). “Cuba. Proporción de Población por Color de la Piel Según Censos. 1981, 2002, 2012”. (キューバ国家統計局. 「国勢調査 肌の色による人口比率」)  
<http://www.one.cu/publicaciones/cepde/cpv2012/20131107resumenadelantado/Graficos/Pag%2039.pdf>, (accessed 2017-3-5).
- [98] Loveman, Mara et al. “How Puerto Rico Became White: Boundary Dynamics and Intercensus Racial Reclassification”. *American Sociological Review*. 2007, 72(6), pp. 915-939.
- [99] Trinidad and Tobago. Central Statistical Office. *2011 Population and Housing Census Demographic Report*. 2012. CIA World Factbook. World Bank. などのデータを使用し作表. 2018年6月末現在の最新データを使用.
- [100] 江頭説子「社会学とオーラル・ヒストリー：ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に」『大原社会問題研究所雑誌』2007年 585/2007. 8, pp. 11-32: p.27.
- [101] Mintz, W. Sidney. *Worker in the Cane: A Puerto Rican Life History*. W. W. Norton & Company; Reprint edition, 1974.
- [102] Senior, Carl. “German Immigrants in Jamaica, 1834-8”. *The Journal of Caribbean History*. 1978, 10(25), pp. 25-53.  
---“The Robert Kerr Emmigrants of 1840: The Irish “Slaves” for Jamaica”. *Jamaica Journal*. 1978, 42, pp.104-116.  
Arbell, Modechai. *The Portuguese Jews of Jamaica*. Canoe Press, 2000.
- [103] Henry, Ralph. “Notes on the evolution of Inequality in Trinidad and Tobago”. Kevin Yelvington. (ed.). *Trinidad Ethnicity*. Warwick University Caribbean Studies, Macmillan Press, 1993, pp. 56-80.
- [104] Yelvington, Kevin. “Ethnicity at Work in Trinidad”. Ralph Premdas. (ed.). *The Enigma of Ethnicity: An Analysis of Race in the Caribbean and the World*. A Caribbean Issues Publication, School of Continuing Studies, The University of the West Indies, 1993, pp.99-122.
- [105] Khan, Aisha. “What is Spanish? Ambiguity and ‘mixed’ ethnicity in Trinidad”. Christine Barrow et al. (eds.). *Caribbean Sociology: Introductory Readings*. Ian Randle, 2001, pp.287-304.
- [106] 前掲[1] Ito. pp.632-633.参照.
- [107] 前掲[1] Ito. pp.634-635.参照.

---

### Abstract

This paper explores questions of identity as a European-descended white, in the Caribbean islands of Barbados and Trinidad, and an examination of who is considered white and what constitutes their whiteness in relation to non-whites. In August 2016 and February 2017, oral history interviews were conducted in Barbados and Trinidad with adult participants who consider themselves white and who are considered white by other whites. The interviews were anonymously transcribed word-by-word, reconstructed into narratives without losing the participants’ intention and meaning, and then quoted in this paper’s analysis. The research findings suggest that the European-descended whites in Barbados are willing to speak out about their racial background, that is, you could claim that you are “white” as far as your physical features allow. On the other hand, the European-descended whites in Trinidad insist on their racial purity as white, and show apparent discomfort with the idea of interracial marriage. While maintaining this concept of racial purity as white is difficult in the globalised Caribbean, colonial notions of whiteness still remain in these societies.

---

(受付日：2018年6月18日，受理日：2018年11月22日)

**伊藤 みちる (いとう みちる)**

現職：大妻女子大学国際センター専任講師

英国ウォーリック大学大学院 カリブ海地域研究所 社会調査（オーラル・ヒストリー） 人種・民族研究。専門は旧英領カリブ海地域におけるポストコロニアル社会の政治・経済，社会経済開発，社会問題。在トリニダード・トバゴ日本国大使館専門調査員や駐ガイアナ国連機関プログラム・オフィサー等として，ジャマイカ，トリニダード・トバゴ，ガイアナ，バルバドス等，カリブ海地域での延べ10年間に亘る駐在生活で見聞した問題を中心に研究している。